

付載 三菱レイヨン株式会社 送還水管施設移設工事に伴う発掘調査

一浪ノ上遺跡第2地区・第8地区一

第1節 位置と環境 (付挿図第1・付第2、付図版第1の1・付第3)

第2地区・第8地区は、浪ノ上東部土地区画整理事業範囲(面積96,001㎡)の東西中程の北端部に位置する。昭和56(1981)年5月から昭和57(1982)年9月に実施された本発掘調査区(面積8,950㎡)の北東部、A区からF区調査区のA区とB区に挟まれた地点にある(註1)。

地籍でいえば愛知県豊橋市浪ノ上町10番地の9付近であり、旧地籍は第2地区が豊橋市牛川町字西郷103番地の3、第8地区は豊橋市牛川町字浪ノ上23番地の3である(付挿図第1)。

第2地区・第8地区は牛川台地浪ノ上支丘の「おもどろの沢」谷口の南側にあたり、南から北に向かって突出する舌状台地の基部にある。台地の上面での長さは南北50m、幅は基部で東西55m、先端部で20mを測る。第2地区は第8地区の舌状台地西隣りの斜面の雑木林、第8地区は舌状台地上の平地の畑地にある。なお現状はいずれも市道になっている(付挿図第2)。

註1 木下克己先生と森田勝三が昭和57(1982)年に報告した「浪ノ上遺跡範囲確認調査」(「豊橋市埋蔵文化財発



付挿図第1 浪ノ上遺跡第2地区・第8地区位置図(○印)(1:25,000)

掘調査報告書 第3集〕において、10カ所に設置した調査区（試掘坑）の名称が第1章 位置と地形、第2章 調査の経過、第3章 各調査区の出掘調査は「○○地区」、第4章 考察は「○○地点」と二通りの名称を用いていたことが今になって明らかになった。これにより混乱を招いたことをお詫びしたい。

今回報告する2カ所の調査区は、昭和55年の調査区より発掘面積が広いことから「第2地区」、「第8地区」と呼ぶことにした。

住吉政浩「位置と地形」（『浪ノ上 I』豊橋市教育委員会 2009）の挿図第20参照

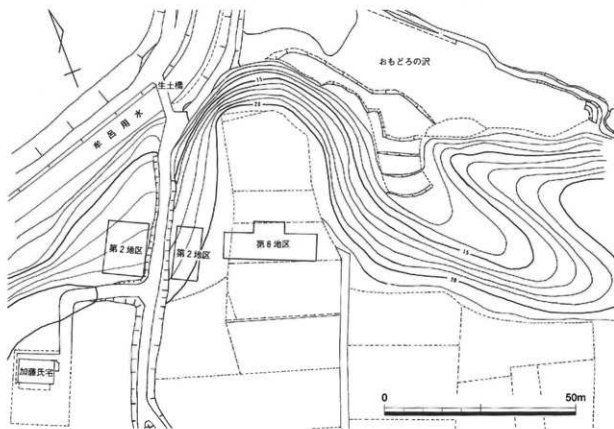
第2節 調査にいたる経緯と経過

1、調査にいたる経緯（付図版第4）

1980（昭和55）年8月2日（日曜日）に、豊橋市牛川町浪ノ上東部土地区画整理組合員（設立準備委員会）の篠田進、戸田茂夫の両氏等と木下克己との会合が持たれた。そこで組合側から牛川通四丁目にある三菱レイヨン株式会社豊橋事業所が、送還水管施設移設工事を浪ノ上東部土地区画整理地内の一部に区画整理工事が始まる前に実施するとの話があった。

工事は県道中宇利・豊橋線（別所街道）西方50mの地点から西方約400mにある牟呂用水に掛けて、幅が6m、深さは現地地表から1.8mを掘り下げるとのことであった。

浪ノ上東部土地区画整理事業地内については、1979（昭和54）年9月から1980年3月にかけて、豊橋市教育委員会の依頼を受け、木下克己が浪ノ上遺跡範囲確認調査（註1）を実施している。この結果



付挿図第2 浪ノ上遺跡第2地区・第8地区地形図

に基づき第2地区と第8地区の両地区が工事範囲内に該当することが明らかになった。そしてこの2カ所について発掘調査の実施を要望し、了承されたため(註2)急遽、浪ノ上遺跡発掘調査団を組織した。発掘調査の構成は下記のとおりである。

調査担当者 日本考古学協会会員・石巻地区文化財保存会代表：木下克己

調査顧問 日本考古学協会会員：久永春男

調査員 小畑頼孝、石巻地区文化財保存会会員(親和プリント株式会社)：森田勝三

参加者及び調査協力員

桜ヶ丘高等学校：伊海徹・長坂和彦、愛知大学考古学研究会：大羽康祥・梅村上・後藤功・石元晃一・谷口修・増田弘美、奈良教育大学：鈴木敏則、奈良大学：石川明弘、立正大学：野澤剛幸、岡崎養護学校教諭：桑田佳直、吉田方小学校教諭(日本考古学協会会員)：住吉政浩、福岡小学校教諭(日本考古学協会会員)：伊藤恵、浪ノ上東部土地区画整理組合員(設立準備委員会)、親和プリント株式会社：高須丈治、大林組

2、発掘調査の経過

1980(昭和55)年8月20日(土曜日)午前中、浪ノ上東部土地区画整理組合員と木下克己、森田勝三とで発掘調査についての話し合いが行われる。8月30日(土曜日)午前中、浪ノ上東部土地区画整理組合員と木下克己、小畑頼孝とで調査区にトレンチを設定する。9月1日(日曜日)～5日(金曜日)、第2地区から作業を開始する。調査区は斜面の雑木林にあり、その伐採と焼き払いを工事担当者的大林組が実施された。

9月3日(水曜日)午前中、発掘調査の道具についての話し合いを豊橋市教育委員会の山口源吾、浪ノ上東部土地区画整理組合員の戸田茂夫、森田勝三の3名で行った。午後は第2地区の南北に走る幅1.8mの坂道の道路西側壁面の遺構と遺物の確認を行うため、壁面の土を10cmほど削り取る作業を実施した。9月6日(土曜日)第2地区に発掘調査区を設定した。大きさは4m四方を1グリッドとし、南北に走る農道の東側に南北方向に南から北に向かって1区～4区、東西方向は東から西に向かってA区・B区の計8グリッド。道路の西側に南北方向は南から北に向かって1区～4区、東西方向は東から西に向かってC区・D区・E区の計12グリッドを設けた。面積は251㎡である。最初に1E区グリッドの表土層から掘り下げた。表土層から深さ60cmに地山上面があり、地山を掘り込んだ溝状遺構が検出された。日本考古学協会会員の伊藤恵、住吉政浩の両氏が訪れる。

9月7日(日曜日)昨日検出された溝状遺構を掘り進める一方、1E区グリッドの東隣の1D区・1C区グリッドを掘り広げる。それにより1D区グリッドにも1E区グリッドの溝状遺構が伸びていることが確認された。溝状遺構内の理土から土師器と須恵器の細片が数点出土した。1C区グリッドは表土層から地山上面までの厚さ1mほどの堆積土を掘り上げた。1B区グリッドは伐採した木を取り除き、表土層から掘り始める。蒲郡市の竹内尚武氏が訪れる。

9月8日(月曜日)午前中は大雨のため発掘を中止し、大林組の事務所で遺物の水洗いを行った。午後、時折雨が降る中、1B区グリッドを地山上面まで掘り上げた。遺構と遺物は検出されなかった。これにより道路東側の調査区には遺構が存在しないと考え、調査を道路西側に集中することにした。

1 C区グリッドは、昨日に引き続き堆積土を掘り下げると黒色土が確認されたので遺構の有無の確認を行った。

1 D区・1 E区グリッドは北側半分に確認された溝状遺構を掘り上げる一方で、南側半分から7個の柱穴が検出された。これにより溝状遺構を竪穴住居跡2-SB1とした。2個の柱穴の埋土から土器片が検出された。1 D区・1 E区グリッド北隣りの2 D区・2 E区グリッドを掘り掘げ2-SB1の追求を行った。道路の西側南北断面の層序分けを行った。9月9日（火曜日）道路の西側南北断面図を作成した。1 D区・1 E区グリッド内の2-SB1の東西、南北断面図を10分の1で作成した。9月12日（金曜日）2-SB1に伴うと考えられる柱穴が27個と多数検出された。柱穴が多いため再度検討を行った。結果は何れも柱穴と確認された。1 C区・1 D区グリッドの幅50cmの間壁を取り除き、2-SB1の平面形の追求をする。これにより平面形は東西に長軸をもつ楕円形と考えられる。

9月13日（土曜日）本日から第8地区の発掘調査を開始する。トレンチを2条設定した。長さ南北6m、幅30cm。15mの間隔を置き西側をAトレンチ、東側をBトレンチとした。これによりAトレンチに土壌状遺構が検出された。9月14日（日曜日）第2地区の2-SB1平面図を10分の1で作成した。第8地区は前日のトレンチ調査により遺構が確認されたため、長さ東西25m、南北7m。面積191㎡の調査区を設定した。その調査区を長さ東西5m、南北3.5mを1グリッドとし、東西は西から東に向かってA区～E区の5区、南北は南側をS区、北側をN区の2区とし、計10グリッドに分けた。調査区の表土層、厚さ約20cmを重機を用い取り除いた。その後、調査区の長軸方向の東西の南北中央に長さ25m、幅30cmの東西トレンチを1条。短軸方向の南北には長さ7m、幅30cmのトレンチをA区にAトレンチ、D区にBトレンチを1条ずつ、計3条を設定した。Aトレンチの南北中央に長さ2.4m、深さ60cmの土壌8-SK1を検出した。

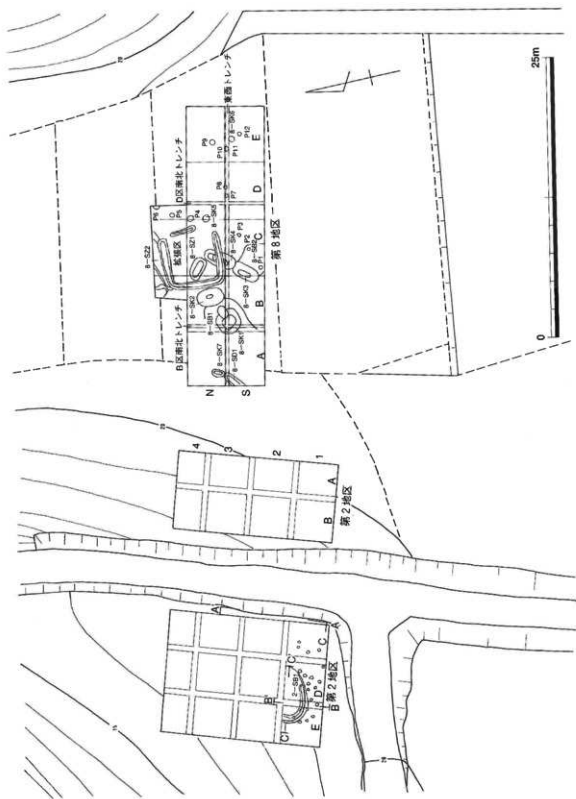
9月15日（月曜日）昨日検出した8-SK1の平面形を追求する。A区グリッドの第2層の黒色土を掘り下げる。9月16日（火曜日）BN区グリッドに地山の黄色礫層に掘り込んだ、8-SK2と方形周溝墓8-SZ1の周溝と思われる溝を検出した。9月17日（水曜日）この発掘調査の顧問である久永春男先生を招いて調査状況を見ていただき、ご指導ご教示をいただいた。

BN区グリッドに検出された8-SZ1の周溝の範囲を確認するために、BN区グリッドの東隣りCN区グリッドを掘り掘げると周溝がくの字折れ曲がり東に伸びていることが明らかになった。CS区グリッドに南北方向に伸びる溝状遺構が確認される。

第2地区の2-SB1の東西、南北断面図を10分の1で作成した。

9月19日（金曜日）8-SZ1の周溝が北側に伸びていることが明らかになり、BN区・CN区・DN区グリッドの北側に長さ3m、面積が25㎡の拡張区を設けた。CS区グリッドの溝状遺構を掘り下げると、南北に2つに分かれた8-SK3と8-SK4が検出された。調査区の東西トレンチA-A'断面図、8-SK1の南北断面図、8-SK2・8-SK3・8-SK4、8-SZ1主体部の東西断面図、調査区東側の8-SK6、柱穴群8-P9～8-P12の平面図、8-P7～8-P9の断面図を10分の1で作成した。

9月20日（土曜日）BN拡張区・CN拡張区グリッドで8-SZ1の周溝がくの字状に東に伸びていることが明らかになった。これにより周溝はコの字状に屈折することが確認され、さらにDN区グ



付埋図第3 第2地区・第8地区全体図

リッドに南北方向に1条の周溝が確認された。またC N区グリッドの西側に8-S Z 1主体部と考えられる土壌墓が検出された。8-S K 1を掘り上げ、写真撮影を行った。9月21日(日曜日)調査区のD-D'断面図、E-E'断面図を10分の1で作成した。9月22日(月曜日)8-S K 2・8-S K 3を掘り上げ、8-S Z 1と共に写真撮影を行った。午後、各遺構がほぼ掘り上がったので遺跡の全体写真撮影を行った。

調査区の東西トレンチB-B'断面図、C-C'断面図、8-S K 6平面・断面図を10分の1で作成した。8-S Z 1の東側周溝内から出土した土器の平面・断面図を5分の1で作成した。

9月23日(火曜日)調査区の全体平面図を50分の1で作成した。9月24日(水曜日)8-S Z 1・8-S Z 2の平面、南北断面図、8-S K 1・8-S K 2・8-S K 3・8-S K 4・8-S K 5、竪穴状遺構8-S B 1・8-S B 2、8-P 1～8-P 6、8-S K 7、溝状遺構8-S D 1の各遺構の平面図を10分の1で作成した。9月26日(金曜日)8-S Z 1の東西断面図、8-S K 3・8-S K 4の南北断面図を10分の1で作成した。本日を持って発掘調査を終了した。

註1 浪ノ上遺跡範囲確認調査では、10カ所に試掘坑を設定し遺構と遺物の有無の確認を行った。

木下克己・森田勝三「浪ノ上遺跡範囲確認調査」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集』豊橋市教育委員会 1982

註2 この発掘調査に当たっては、調査担当者の木下克己先生が体調不良のため病床にあり、調査員の小畑頼孝と森田勝三がその任を負った。

木下克己先生の「遺跡処理雑記」ノートより。

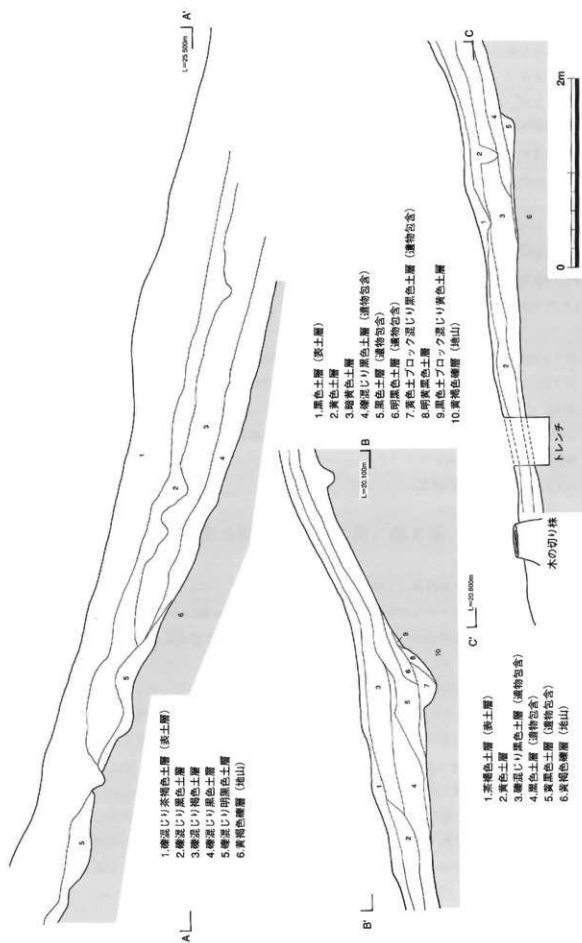
第3節 第2地区の遺構と遺物

1、道路西側壁面(付挿図第3・付第4、付図版第1の2)

東西に2つ分けた調査区のやや東寄りに南から北に向かって走る幅1.8mの切り通しの坂道がある。調査はこの坂道の西側壁面の高さ1m～1.5mを利用し、南北の長さ10mほどを精査し、断面図を10分の1で作成した。

断面図を作成した坂道の勾配は南から北に向かって16°下がる。層序は、第1層は表土層で礫混じり茶褐色土層、厚さは24cm～69cm。第2層は0点から1.65mの位置から始まる礫混じり黒色土層、厚さ10cm～39cm。第3層は0点から2.9mの位置から始まる礫混じり褐色土層、厚さ13cm～43cm。第4層は0点から3.0mの位置から始まる礫混じり黒色土層、厚さ10cm～30cm。第5層は0点から3.5mで終わる礫混じり明黒色土層、厚さ10cm～25cm。第6層は地山の黄褐色礫層である。

確認された5層は斜面上部からの自然堆積と考えられる。第1層の表土層に1カ所、第2層に5カ所、第5層に1カ所それぞれ下層を掘り込むV字状またはU字状の窪みが認められたが、遺物は見出されなかった。この掘り込みは人為的なものとも考えられるが、その性格や年代は不明である。



付録図第4 第2地区 道路西側壁面・調査区断面図

2、堅穴住居址 2-SB1 (付挿図第3・付第4・付第5・付第12、付図版第2、付表第1)

(1) 遺構 (付挿図第3・付第4・付第5、付図版第2、付表第1)

堅穴住居址は西調査区の1D区・1E区グリッドから検出された。住居址は斜面に造られており、地山上面の勾配は、南から北に向かって19°、西から東に向かって9°下がっている。

住居址は側半分の地山を掘り下げ、その土砂を用い北側半分を埋め立て整地したと考えられる。このため地山を掘り込んだ南側半分は遺存し、埋め立てた北側半分は遺存していなかった。平面形は遺存していた南側半分から推定復元して楕円形と考えられる。長軸方向はN-77°-Wである。東西の長さは壁上端で5.28m、床面で壁溝も含め5.17m、南北は現状で壁上端で2.8m、床面で2.42mを測る。深さは斜面に造られているため、南壁中程西寄りで壁上端から38cm、西壁側で16cm、東壁側で3cmを測る。

壁溝は壁中程東寄りから始まり西壁を巡っている。幅は南壁中程で上端が50cm、下端は16cm、深さは床面から14cm。西壁の上面で60cm、下面は22cm、深さは床面から22cmを測る。

床面は平坦であるが南から北へ、また東から西へ向かっていずれも5°程傾斜している。床面には炭化物や土器片が散布していた。炉址は住居址東部にあり、東壁下端から西に炉址の中心で測って45cmの位置にある。平面形は楕円形を呈する。大きさは東西の長さ37cm、南北は28cm、周囲を大ききさ3cm~11cmの石を11個用い囲っている。

柱穴は27個が検出された。住居址内に6個あり、床面に2個(P1・P2)、壁溝内側沿いに3個(P3~P5)、壁外側沿いに1個(P6)。住居址外には21個(P7~P27)あり、それぞれの柱穴の計測値は表第1に表した。

住居址内にある柱穴の位置は、床面から検出した2個は、P1が南壁溝内側から柱穴の中心までの長さは75cm、西壁南内側から1.32mにある。P2は南壁下端から1.07m、東壁下端から同じく1.5mにある。2つの柱穴の間隔は柱穴の中心で1.65mを測る。

壁溝内側沿いのP3~P5の3個は西南壁隅から南壁のほぼ中程にあり、壁溝内側の下面に掘られている。柱穴の間隔はP3とP4とは92cm、P4とP5とは98cmを測る。

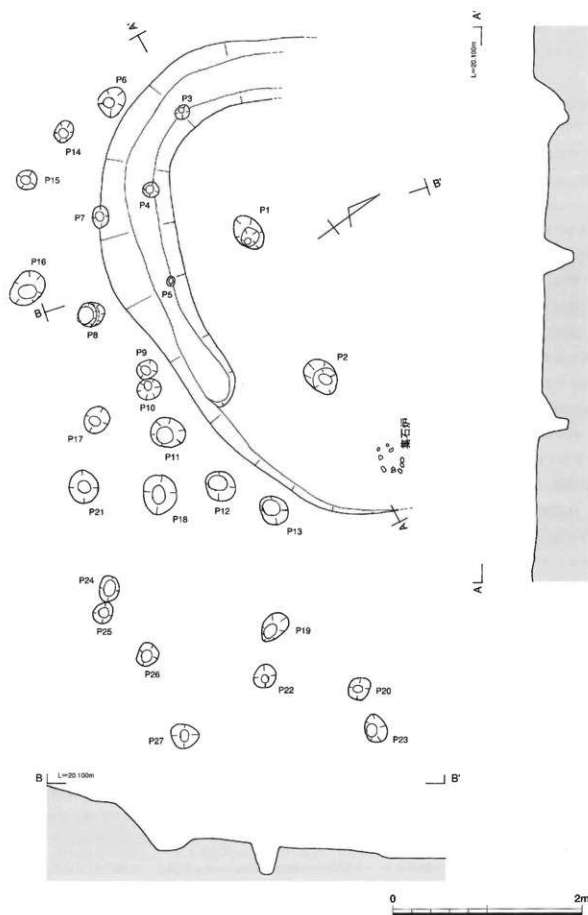
壁の外側沿いにあるP6は南壁中程の西寄りに検出された。

住居址外にある柱穴は南壁に沿った斜面にあり、弧状に4重の列をなして分布していたと考えられる。柱穴列は壁に近い列から南に遠ざかるにつれ1列目から4列目とした。1列目にはP7~P13の7個があり、壁上端から1列目の柱穴の中心での間隔は22cm~2.85mある。7個の柱穴の間隔は柱穴の中心で測ってP7とP8は2.25m、P8とP9は85cm、P9とP10は上面が重なり合い16cm、P10とP11は55cm、P11とP12は75cm、P12とP13は65cmを測る。

2列目はP14~P20の7個があり、1列目との間隔が45cm~95cmを測る。7個の柱穴の間隔はP14とP15は65cm、P15とP16は1.18m、P16とP17は1.55m、P17とP18は1.05m、P18とP19は1.9m、P19とP20は1.1m測る。

3列目はP21~P23の3個があり、2列目との間隔が45cm~50cmを測る。3個の柱穴の間隔はP21とP22は1.9m、P22とP23は1.48mを測る。

4列目はP24~P27の4個があり、3列目との間隔が95cm~105cmを測る。4個の柱穴の間隔はP



付挿図第5 第2地区 2-SB1平面・断面図

付表第1 第2地区 竪穴住居址柱穴計測値表

(単位 cm)

番号	上面短径×長径	下面短径×長径	深さ	位 置	番号	上面短径×長径	下面短径×長径	深さ	位 置
P 1	28×40	8×8	31	竪穴内	P 15	21×23	9×10	12	竪穴外2列
P 2	30×40	10×15	27	竪穴内	P 16	30×39	15×19	20	竪穴外2列
P 3	22×14	6×7	7	竪穴内周溝	P 17	26×28	10×11	28	竪穴外2列、土器出土
P 4	17×18	8×10	18	竪穴内周溝	P 18	34×45	14×20	28	竪穴外2列
P 5	8×11	4×6	5	竪穴内周溝	P 19	22×35	12×17	34	竪穴外2列、土器出土
P 6	17×24	9×10	19	竪穴内壁上端	P 20	23×26	6×9	18	竪穴外2列、土器出土
P 7	27×31	10×12	28	竪穴外1列	P 21	30×35	15×16	20	竪穴外3列
P 8	26×26	17×19	35	竪穴外1列	P 22	23×25	9×9	27	竪穴外3列
P 9	19×23	10×10	15	竪穴外1列	P 23	21×30	11×14	23	竪穴外3列
P 10	22×25	7×10	23	竪穴外1列	P 24	22×26	14×16	12	竪穴外4列
P 11	31×38	17×20	44	竪穴外1列	P 25	20×22	10×12	11	竪穴外4列
P 12	31×34	17×20	26	竪穴外1列	P 26	22×24	12×12	14	竪穴外4列
P 13	29×32	18×20	27	竪穴外1列、土器出土	P 27	25×31	11×12	18	竪穴外4列
P 14	17×24	9×10	13	竪穴外2列					

24とP25は28cm、P25とP26は65cm、P26とP27は95cmを測る。

これらの柱穴は、P1とP2は位置や大きさから考えて主柱としてよからう。それ以外のP3からP27はすべて支柱と考えられる。

(2) 遺物 (付挿図第12)

遺物は竪穴住居址埋土の黒色土層に縄文式土器(1)、土師器(2・3)が包含され、住居址床面から須恵器(4)が出土している。また柱穴P13・P19の埋土から土師器細片、P16・P20の埋土から土器細片が出土している。

深鉢形土器(1) 胴部の破片で、貝殻の復縁による右下がり条痕が施されている。

高坏形土器(2・3) 2は脚基部でハの字に開き、内面はヘラナデ痕があり、3個の円孔が穿たれている。3は脚下半部で、ハの字に開き端部を内彎させ薄く丸く作る。外面は縦ヘラミガキ、内面は横クシナデが施されている。

坏蓋(4) 口辺部片で、稜をもちハの字に外開きし、口端内面をヘラ切りし断面形を三角形に作っている。

遺物の時期は、1は縄文時代晩期末の条痕文系の水神平式土器(注1)。2・3は古墳時代前期初頭の古式土師器である浪ノ上・門前期様式(注2)。4は古墳出土須恵器編年の第3型式(注3)と考えられる。また柱穴から出土した遺物は細片のため時期を明らかにすることは出来なかった。

竪穴住居址の築造年代は、6世紀代と推察される。

注1 久永春男「解説 三河の縄文式土器」『豊橋市公民館郷土資料室日録』1953

注2 久永春男「付載 尾三地方における弥生式土器の編年 一門前遺跡出土土器を中軸として」『門前遺跡』蒲郡市教育委員会 1980

森田勝三「浪ノ上遺跡範囲確認調査・第3章 各調査区の発掘調査」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集』豊橋市教育委員会 1982

森田勝三「愛知県における4・5世紀の土師器」『日本考古学協会第51回総会』日本考古学協会 1985

註3 久永春男・斎藤嘉彦「三河における古墳出土須恵器の編年」『天神山古墳群』愛知県岩津高等学校 1969

芳賀 陽「東三河における古墳出土須恵器の編年」『二本松古墳群』愛知県営開発パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団 1976

第4節 第8地区の遺構と遺物

1、南北トレンチ（付挿図第3・付第7・付第13）

トレンチ断面の基本層序は、第1層は濃茶褐色土層、第2層は黒褐色土層および黒色土層、第3層は黒褐色土および暗黄色土層、第4層は地山の黄色礫層である。

（1） B区南北トレンチ（付挿図第3・付第7・付第13の1～3、付図版第12の1）

遺物は第2層の黒褐色土層から、縄文式土器（1・2）と弥生式土器（3）が出土している。

深鉢形土器（1・2） いずれも胴部片で、二枚貝の複縁による横位の条痕が施されている。

壺形土器（3） 上胴部片で、3条一組の横線の下に5条一組のクシガキ連弧文をめぐらしている。

（2） D区南北トレンチ（挿図第3・付第7・付第13の4～10、付図版第12の10）

遺物は第2層の黒色土層から、土師器（4～8）と土師質土器（9・10）が出土している。

壺形土器（4・5） 4は上胴部片で、器壁は薄く、球形を呈すると考えられる。外面は右下がりハケナデ調整、内面には輪積み痕が残っている。5は底部で、器壁は薄く底面を上げ底に作り、内面はヘラナデ調整がみられる。

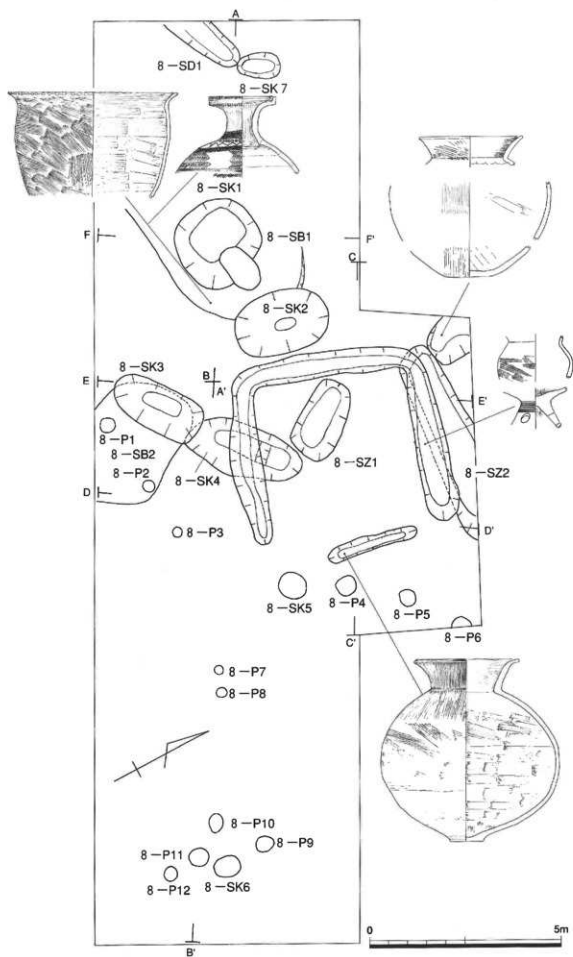
高坏形土器（6～8） 6は坏部の口辺部で、口唇部の内面をヘラで斜め切り、断面形が二等辺三角形を呈している。内外面を縦ヘラミガキ、口唇部の内面は横ヘラナデ調整されている。7は坏部で半球形を呈し、口縁部は僅かに外開きし、口唇部の内面はヘラで面取りし断面形を三角形に作っている。調整は内外面とも縦にヘラミガキされている。8は脚部の下半部で、ハの字形に内彎ぎみに開き、脚端部は角張らしてある。内面は左下がりの横ハケメ調整されている。

甕形土器（9・10） 2点とも口縁部から上胴部である。9の器壁が薄い作りで、口辺部は短くくの字に屈折し、口唇部は丸めている。胴部は僅かに膨らむ。10の器壁は上胴部より厚く、口辺部を強くくの字形に屈折し、口唇部を上下に拡張し丸めている。胴部は僅かに膨らむ。口辺部の外面は横ハケナデ調整されている。

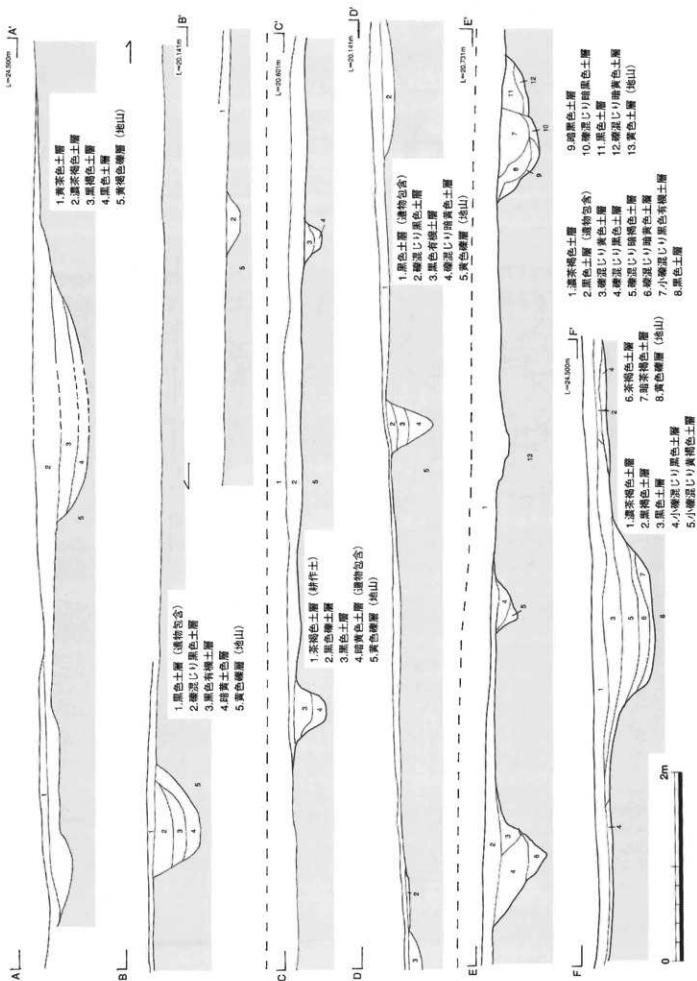
両トレンチ出土の遺物の時期は、1・2は縄文時代晩期末の条痕文系の水神平式土器。3は弥生時代中期後葉の長床式土器（註1）。4～8は古墳時代前期初頭の古式土師器の浪ノ上・門前期。9・10は平安時代前期と考えられる。

2、グリッド（付挿図第3・付第7・付第13・付第14・付第17、付図版第12・付第15）

（1） AS区グリッド（付挿図第3・付第7・付第13の11～28・付第18の125～127、付図版第12



付挿図第6 第8地区 調査区全体図



の3・付第4・付第15の2・3・4)

遺物は第2層の黒褐色土層から、縄文式土器(11~18)、弥生式土器(19~28)、石器(125~127)が出土している。

深鉢形土器(11~18) 11・12は口辺部片で直立し、口端の内面を斜めに面取りしている。外面は二枚貝の腹縁による11は右下がり、12は左下がりの条痕が施されている。13~18は胴部片で、13~17は二枚貝の腹縁により13・14は右下がり、15・16は羽状、17は横位の条痕が施されている。18は繊維束状器具を用い細い羽状に仕上げている。

壺形土器(19) 平底の底部で、器壁は薄い作りである。

甕形土器(20~28) 口辺部の形態により2種類に分けられる。

1類(20・21) S字口縁である。口辺部はくの字形に開き、口縁部はS字形に屈折し、口唇部はヘラを用い内側斜めに面取りされている。21は20に比べ口縁部の開きが大きい。20は屈折部に丁寧に櫛状器具を用いキザミ刺突文をめぐらす、21にはみられない。調整は20の口縁部の内外面とも横ナデ、口辺部の外面は右下がり、肩部の外面は横と右下がり、内面は不定方向にハケメが施されている。21は口辺部を内外面とも横ナデ、肩部外面は左下がり、内面は横と右下がりハケメが施されている。

2類(22~27) 口辺部はやや強くくの字形に屈折している。器壁は同じ厚みで、口唇部は丸めてある。22・23・26・27は口唇下端に棒状器具による櫛円圧痕、24はヘラ状器具で斜位のキザミをめぐらす、25は無文である。調整は24、25を除いて外面は右下がりのハケメ、屈折部には指圧痕、内面は25を除き横ハケメがみられる。

28は台付甕の脚台部片で、ハの字形に直線的に開き、台部端を角張らしている。

打製石斧(125) 小型の短冊形で、扁平な石の周縁を両面から打ち欠いて作ってある。刃部には使用痕がみられる。重さは28gを測り、石材は緑色片岩である。

石錘(126) 片面を欠く。円礫を割った横長のもので、短軸の片面のみに剥離を施してある。重さは98gを測り、石材は硬砂岩である。

磨石(127) 扁平な円礫の一部を用い、表裏面は平たく磨痕面がある。重さは379gを測り、石材は砂岩である。

(2) B S区グリッド(付挿図第3・付第7・付第18の128、付図版第15の5)

遺物は第2層の黒褐色土層から、石器(128)が出土している。

局部磨製石斧(128) 頭部を欠損している。短冊形を呈し、片面は自然面、もう片面は剥離調整痕が残る。両側縁部は両面から剥離調整を加えてある。刃部はU字状を呈し、刃部は両刃で研磨されている。使用痕がみられる。重さは208gを測り、石材は片麻岩である。

(3) B N区グリッド(付挿図第3・付第7・付第14の29~38、付図版第12の5・付第13の1)

遺物は第2層の黒褐色土層から、縄文式土器(29~36)と弥生式土器(37~38)が出土している。

深鉢形土器(29~36) 9点とも胴部の破片である。29は器壁が厚く、棒状器具をもちい2条一組の縦位の沈線で区画し、その間に綾杉状文を施している。30~34は二枚貝の腹縁による30・33には右下がり、31・32・34には横位の条痕が施されている。35は繊維束状器具によるやや細い右下がり条痕、36はヘラナデが施されている。

高坏形土器 (37) 脚部下部片で、ハの字形に内彎ぎみに開き、器壁は脚端部が薄く作られ、脚端は面取りし角張っている。外面は縦ヘラキガキ、脚端部は横ナデ、内面は横ハケメ調整されている。

甕形土器 (38) 台付甕の脚台部片で、下半分でハの字に内彎ぎみに開き、器壁の厚みはほぼ同じである。外面はヘラナデ、内面はハケメ調整されている。

(4) CS区グリッド (付挿図第3・付第7・付第14の39~55、付図版第12の6・付第7・付第8・付第13の1)

遺物は第1層の黒色土層から、縄文式土器 (39~54) と土師器 (55) が出土している。

深鉢形土器 (39~54) 外面の仕上げにより3種類に分けられる。

1類 (39) 無文である。39は繊維土器の胴部片で、胎土に繊維を含み、内外面に繊維の痕跡がみられる。内外面ともに右下がりヘラナデ調整がされている。

2類 (40~52) 条痕である。40・41は口辺部片で、外方へ僅かに開いている。口唇部は平坦に面取りされ、41は口端面中程に沈線をめぐらしている。42~52は胴部片である。二枚貝の復縁、またはクシ状器具を用いて、条痕の幅が広いもの (42~47)、狭いもの (48~52) とに分けられる。条痕の方向は横位 (40~49)、右下がり (50・51)、縦位 (52) がある。

3類 (53・54) 擦痕である。外面は右下がりヘラナデ調整がされている。

甕形土器 (55) 口辺部の破片で、ハの字形に外開きし、器壁は口辺部から口唇部に向かうにしたがって薄く作ってある。口唇部は外側を面取りし、内側に段をめぐらしている。

(5) DN区グリッド (付挿図第3・付第7・付第14の56~61、付図版第13の1)

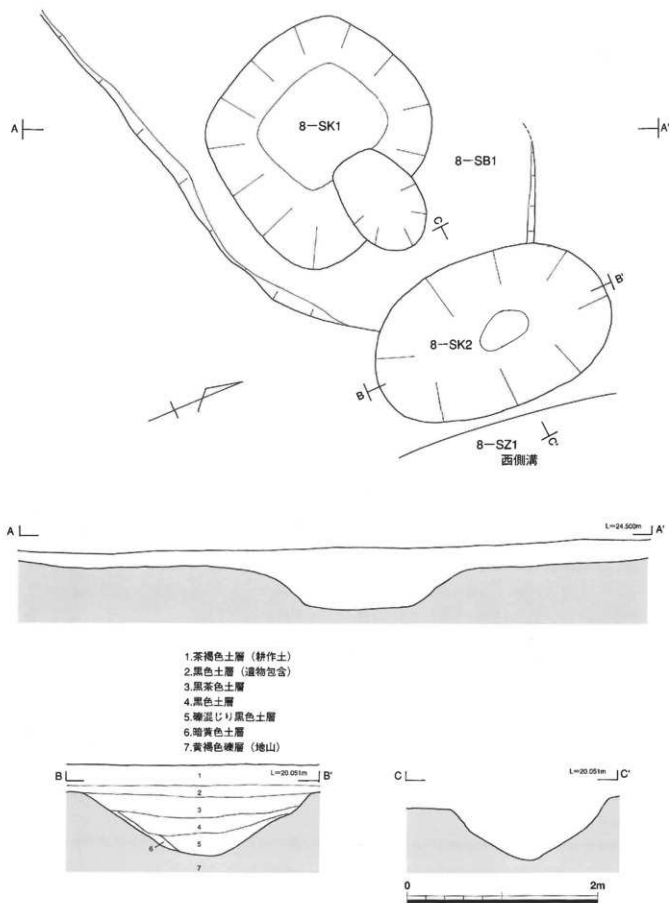
遺物には、縄文式土器 (56・57) と土師器 (58~61) が出土している。

深鉢形土器 (56・57) 胴部の破片である。二枚貝の復縁による56は浅い右下がり、57は左下がり、と右下がりの条痕が施されている。

高坏形土器 (58~60) 58・59は坏部である。58は口辺部片で口唇部の内側をヘラで面取りし、断面形が二等辺三角形を呈し、横ヘラナデが施されている。口辺部の内面は縦ヘラミガキ調整が施されている。59は口辺部と盤部との接合部で、外面に稜を作り、内外面とも縦ヘラミガキ調整が施されている。60は脚部の下半分で、やや内彎ぎみにハの字に開き、脚端部は丸く作られている。外面は縦ヘラミガキ、内面は下がりのハケメ調整がされている。

甕形土器 (61) 台付甕の脚台部片で、円錐台形を呈し、脚台部がやや内彎ぎみに開き、脚端部はやや丸く作られている。外面は縦ハケメ、内面は左下がりと右下がりのハケメ調整がされている。

各グリッドの包含層から出土した遺物の時期は、39が縄文時代早期後葉の繊維土器 (註2)。29は中期後葉末期の芋川C6期 (註3) で、曾利V式土器 (註4) と並行期と考えている。11~18・30~36・40~54・56・57は晩期末の水神平土器と考えられる。22~28は弥生時代中期後葉の長床式土器、19・20・21・38・58~61は後期後葉の欠山式土器 (註5)。37・55は古墳時代前期の古式土師器である浪ノ上・門前期様式と考えられる。石器の125~128は縄文時代晩期末の条痕文系の水神平式土器に伴う時期と考えられる。



付挿図第8 第8地区 8-SB1・8-SK1・8-SK2平面・断面図

3、竪穴状遺構（付挿図第6・付第7・付第8・付第9・付第14・付第15、付図版第6・付第13）

（1） 8-SB1（付挿図第6・付第7・付第8・付第14・付第15、付図版第6・付第13）

ア 遺構（付挿図第6・付第7・付第8）

B区の南北方向の中程に位置している。

西側半分は削平され、竪穴内の東部にSK-1、東端部にSK-2の西端部が掘り込んでいる。

平面形は遺存部分が少ないが推定復元して楕円形と考えられる。遺存していた南壁の長さは4.9m、北壁は東側の長さ1.07mである。幅は東部の壁上端で3.15m、壁下端は2.95m。深さは地山上面から15cmを測る。

埋土は遺物を包含する黒色土層である。

遺物は埋土と床面から縄文式土器と弥生式土器が出土している。

イ 遺物（付挿図第14の62～65・付第15の66・67、付図版第13の1・付第2・付第3・付第4・付第5）

62・63が埋土、64～67は床面から出土している。縄文式土器（62・63）と弥生式土器（64～67）がある。

深鉢形土器（62・63） 胴部の破片である。二枚貝の復縁による62は右下がり、63は左下がりの条痕が施されている。

壺形土器（64） 口頸部から上胴部にかけての破片で、口頸部はハの字形に開き、口辺部は稜を作り短く直立する受口で、口唇部は内面を面取している。胴部は肩部に僅かの張りをもっている。外面は口唇外面と口辺屈折部にアナダラ属の貝殻の復縁によるキザミメをめぐらし、口頸部と胴部の接合部から上胴部にかけて、その上部からクシ描き波文、棒状器具の先端を用い押引凹文、ヘラ描き鋸歯文、クシ描き波文、ヘラ描き羽状文を横位に2段めぐらし、このヘラ描き羽状文は4区画に配している。さらにその下方にクシ描き横線文、ヘラ描き斜格子文をめぐらしている。内面は口辺部が横ナデ、頸部は縦ヘラナデ、口頸部と胴部の接合部は横ヘラナデ調整がされている。

甕形土器（65～67） 口辺部から下胴部の破片である。口径が腹部より大きい作りである。口辺部は強くくの字形に屈折させている。器壁の厚みは同じで、口唇部は65・66は丸く、67は角張っている。65・66は口唇部の下端に棒状器具による楕円圧痕列、67にはヘラ状器具によるキザミメをめぐらしている。胴部はいずれも僅かに膨らみをもつ。調整は65の外面は右下がりハケメ、66は縦と右下がりハケメ、67は右下がりハケメとヘラナデがされている。内面は3点とも横ハケメ、右下がりヘラナデ調整がされている。底部は欠損して明らかでないが、脚台部をもたない平底であろう。

遺物の時期は、62・63は縄文時代晩期末の条痕文系の水神平式土器、64～80は弥生時代中期後葉の長床式土器と考えられる。

8-SB1が営まれたの時期は、弥生時代後期後葉と考えられる。

（2） 8-SB2（付挿図第6・付第7・付第9、付図版第6）

ア 遺構（付挿図第6・付第7・付第9、付図版第6の2）

調査区中程の南側に位置している。

南壁と東壁南半部は、調査区外に伸びており検出されなかった。西壁には8-SK3が掘り込んでいる。平面形は推定復元して隅円長方形であろう。長軸の方向は東南-西北である。規模は現状で東西の長さは壁上端で2.26m、壁下端は2.19m。南北は壁上端で2.50m、壁下端は2.25m、深さは地山上面から17cmを測る。床面は平坦である。柱穴が3個検出され、8-P1と8-P2は竪穴内にある。8-P1は南壁沿いの東西方向の中程にあり、大きさは上端が40cm×47cm、下端は21cm×27cm、深さは床面上面から24cm。8-P2は東北壁隅にあり、大きさは上端が25cm×27cm、下端は12cm×14cm。深さは床面上面から20cmを測る。8-P3は竪穴外にあり、竪穴東隅から東へ1.15mに位置する。大きさは上端が37cm×41cm、下端は12cm×20cm。深さは床面上面から26cmを測る。柱穴の間隔は8-P1と8-P2は柱穴の中心で2.0m、8-P2と8-P3は1.56mを測る。

柱穴は東西方向に直線的に並んでおり、この竪穴とは別の遺構に伴うものかも知れない。

遺物は検出されなかった。西壁に8-SK3が掘り込んでいることから8-SK3より古く、縄文晩期末以前の時期が考えられる。

4、土壌（付挿図第6・付第7・付第8・付第9・付第10・付第15、付図版第6・付第7・付第13）

（1） 8-SK1（付挿図第6・付第7・付第8・付第15、付図版第6・付第13）

ア 遺構（付挿図第6・付第7・付第8、付図版第6の1）

8-SB1の東部に位置している。

平面形は隅円方形を呈し、東壁中程に楕円形のピットをもっている。長軸方向はN-3°-Wである。断面形はU字形である。規模は東西の長さは壁上端で2.25m、壁下端は97cm。南北は壁上端で2.3m、壁下端は1.23m。深さは地山上面から52cmを測る。ピットの規模は東西の長さ1.08m、南北は75cmを測る。断面形は浅い鍋底形である。

埋土は上層から小礫混じり黄褐色土層、茶褐色土層、暗茶褐色土層の3層である。

遺物は埋土から縄文式土器、弥生式土器、土師器が出土している。

イ 遺物（付挿図第15の68～71、付図版第13の7）

遺物は縄文式土器（68・69）、弥生式土器（70）、土師器（71）がある。

深鉢形土器（68・69） 2点とも口辺部の破片である。68は内傾し、口端は平坦で外方へやや拡張している。69はハの字形に外開き、口唇部は面取りし角張っている。外面はいずれも二枚貝の復縁による68は横位、69は右下がりの条痕が施されている。69は内面に一条の横位沈線をめぐるしている。

甕形土器（70） 口辺部の破片で、くの字形に屈曲し、口唇に棒状器具による円形圧痕列をめぐるしている。外面は右下がりハケメ、内面は横ハケメ調整がされている。

高環形土器（71） 脚部である。円錐形でハの字形に開き、脚部下方で大きく外方に屈折し開いている。屈折部の内側に稜がつき、脚端は丸い作りである。外面は縦ヘラナデ、内面は横ナデ調整がされている。

時期は68・69は縄文時代晩期末の水神平式土器、70は弥生時代中期後葉の長床式土器、71は古墳時代中期の青山式土器（註5）と考えられる。

8-SK1が造られた時期は、縄文時代晩期末と推測される。

(2) 8-SK2 (付挿図第6・付第7・付第8・付第15、付図版第6)

ア 遺構 (付挿図第6・付第7・付第8、付図版第6の1)

8-SK1の東隣り70cmに位置している。

平面形は小判形を呈する。断面形は緩やかなV字形である。長軸方向はN-20°-Wである。規模は南北の長さは壁上端で2.62m、壁下端は59cm。東西は壁上端で1.65m、壁下端は32cm。深さは地山上面から63cmを測る。

埋土は上層から黒茶色土層、黒色土層、礫混じり黄褐色土層、暗黄色土層の4層である。

イ 遺物 (付挿図第15の72・73)

遺物は埋土から縄文式土器(72・73)が出土している。

深鉢形土器(72・73) 2点とも胴部片である。二枚貝の復縁による72は右下がり、73は横位の条痕が施されている。

遺物の時期は縄文時代晩期末の水神平式土器である。8-SK2が営まれた時期は縄文時代晩期末と推測される。

(3) 8-SK3 (付挿図第6・付第7・付第9、付図版第6の2)

ア 遺構 (付挿図第6・付第7・付第9、付図版第6の2)

8-SB2の西部に位置している。8-SB2の西壁部を掘り込み、北壁の一部が北隣りにある8-SK4の南壁を掘り込んでいる。

平面形は隅円長方形に近い。断面形はU字形である。長軸方向はN-50°-Eである。規模は南北の長さは壁上端で2.6m、壁下端は89cm。東西は壁上端で1.2m、壁下端は45cm。深さは地山上面から79cmを測る。

埋土は上層から礫混じり黄色土層、礫混じり黒色土層、礫混じり黄褐色土層の3層である。

イ 遺物 (付挿図第15の74-86)

主にSK-3の埋土から出土したものと考えられる(註6)。縄文式土器(74-84)と土師器(85-86)が出土している。

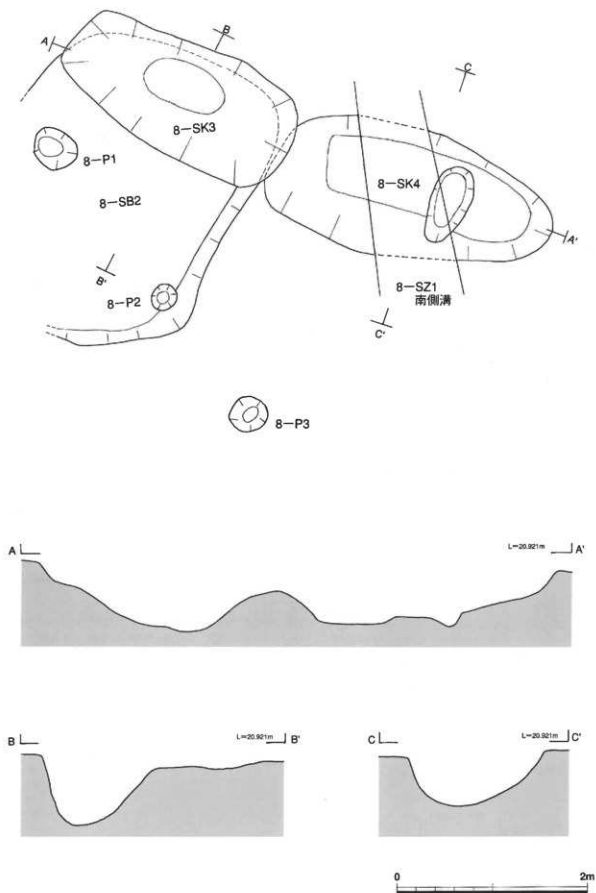
深鉢形土器(74-84) 外面の調整より3種類に分けられる。

1類(74) 繊維土器である。無文の胴部片で、胎土に繊維を含み、内外面に繊維の痕跡がみられる。

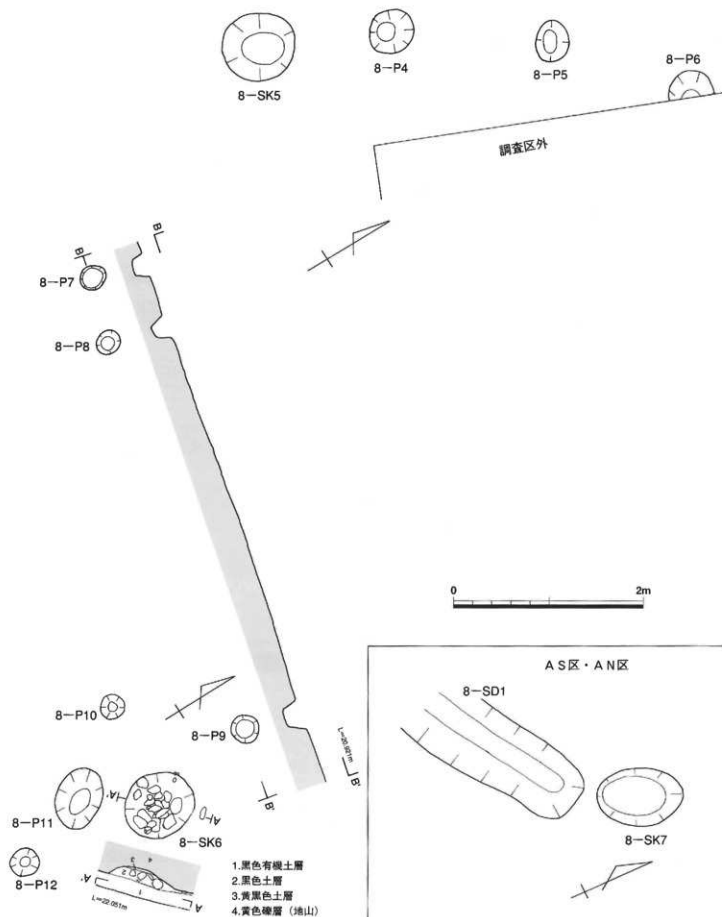
2類(75-83) 条痕である。75-77は口辺部片で、外方へやや開く。口唇を面取りして平坦にし、外方へやや拡張している。78-81は胴部片である。75は半截竹管を用い外面に浅い右下がり、内面は左下がり、76-83は二枚貝の復縁による78は横位、76・77・79-81は右下がり、82・83は右下がりの羽状が施されている。82・83は底部で、平底で端部が82は丸く、83は角張っている。なお83の底面に木の葉痕がみられる。

3類(84) 無文土器の胴部片で、右下がりのヘラナデが施されている。

高坏形土器(85・86) 2点とも脚部片である。85は脚部上部でハの字形に直線的に開き、3個の円孔が穿たれている。86は脚下部で、ハの字形に内増ぎみに開き、3個の円孔が穿たれている。器壁は脚端部に向かうしたがって薄くなり、端部は丸めている。内面は横ハケメ調整されている。



付挿図第9 第8地区 8-SB2、8-SK3・8-SK4平面・断面図



付挿図第10 第8地区 8-SK5・8-SK6・8-SK7、8-SD1、
8-P4～8-P12平面・断面図

時期は74は縄文時代早期後葉の繊維土器、75～84は晩期末の水神平式土器、85・86は古墳時代前期初頭の古式土師器である浪ノ上・門前様式と考えられる。

S K - 3 の営まれた時期は、縄文時代晩期末と推察される。

(4) 8-S K 4 (付挿図第6・付第7・付第9・付第15、付図版第6)

ア 遺構 (付挿図第6・付第7・付第9、付図版第6の2)

8-S K 3 の北隣り位置している。8-S K 3 の北壁の一部が8-S K 4 の南壁に掘り込み、南北方向の中程を8-S Z 1 の南周溝が掘り込んでいる。

平面形は長方形に近い不整楕円形を呈する。断面形はU字形である。長軸方向はN-64°-Eである。規模は南北の長さは壁上端で3.0m、壁下端は2.24m。東西は壁上端で1.5m、壁下端は70cm。深さは地山上面から78cmを測る。また南北方向の北寄りの位置に、方向が南北で平面形が楕円形のピットがある。規模は東西の長が壁上端で85cm、壁下端は61cm。南北は壁上端で45cm、壁下端は35cmを測る。

埋土は上層から礫混じり黄色土層、黒色有機土層、暗黄色土層の3層である。

ア 遺物 (付挿図第15の87～89)

遺物は埋土から出土している。縄文式土器 (87～89) がある。

深鉢式土器 (87～89) 87・88は胴部片である。87は胎土に繊維を含む無文の繊維土器である。88は二枚目の復縁による横位と左下がりの条痕が施されている。89は平底の底部である。

遺物の時期は87は縄文時代早期後葉の繊維土器、88・89は晩期末の水神平式土器である。8-S K 2 が営まれた時期は縄文時代晩期末と推察される。

(5) 8-S K 5 (付挿図第6・付第7・付第10)

調査区の東西中央東寄りにあり、8-S Z 1 の東南隅の東隣り位置している。

平面形は円形を呈する。断面形は浅いU字形である。長軸方向はN-28°-Eである。規模は長さが壁上端で72cm～75cm、壁下端は35cm～44cm、深さは地山上面から10cmを測る。

埋土は黒色土層である。遺物は検出されなかった。

(6) 8-S K 6 (付挿図第6・付第7・付第10・付第19、付図版第15)

ア 遺構 (付挿図第6・付第7・付第10)

調査区の東端部の南北中程にあり、P-11の北東隣りに位置している。

集石の土壌である。平面形は楕円形を呈する。長軸方向はN-46°-Eである。断面形は浅い鍋底形である。規模は長さが66cm×77cm、深さは地山上面から13cmを測る。

埋土は上層の黒色土層、下層の黄黒色土層の2層である。土壌内には大きさが3cm～32cmの砂岩を中心にした河川礫が32個埋積していた。このなかに石皿が1点含まれていた。

イ 遺物 (付挿図第19の134、付図版第15の8)

土壌内の集石のひとつで、石器 (134) がある。

石皿 (134) 楕円形の河川礫を半分に割ったもので、大振りである。断面を台部にし、上面の片側半分を打欠き、もう片側半分には円形状に平坦な磨り面があり、その中央部が円形状にやや窪んでいる。重さは7.1kgを測り、石材は砂岩である。

付表第2 第8地区 柱穴計測値表

(単位 cm)

番号	上面短径×長径	下面短径×長径	深さ	位置	番号	上面短径×長径	下面短径×長径	深さ	位置
8-P1	40×47	21×27	24	8-SB2	8-P7	25×27	20×22	16	D区、土器出土
8-P2	25×27	12×14	20	8-SB2	8-P8	24×28	13×14	28	D区
8-P3	37×41	12×20	26	C区	8-P9	28×28	19×19	30	E区
8-P4	45×52	20×20	30	C区	8-P10	25×25	9×9	25	E区
8-P5	35×45	15×28	28	C区拡張区	8-P11	48×61	19×31	18	E区
8-P6	52×?	25×?	25	C区拡張区、西側半分	8-P12	31×32	10×10	40	E区

時期は、縄文時代晩期末の水準平式土器に伴う時期と考えられる。

8-SK6が営まれた時期は、縄文時代晩期末と推察される。

(7) 8-SK7 (付挿図第6・付第7・付第10、付図版第7)

ア 遺構 (付挿図第6・付第7・付第10、付図版第7の1)

調査区の西端部の南北中程にあり、8-SD1の北隣りに位置している。

平面形は小判形を呈する。断面形はU字形である。長軸方向はN-23°-Eである。規模は長さが60cm×92cm、深さは地山上面から12cmを測る。

埋土は黒色土層である。遺物は検出されなかった。

5、溝状遺構 (付挿図第6・付第7・付第10、付図版第7)

(1) 8-SD1 (付挿図第6・付第7・付第10、付図版第7の1)

調査区の西端部にあり、8-SK7の南隣りに位置している。

北東-南西に長軸をもち、南西部が調査区外にあり形状は明らかに出来なかった。長軸方向はN-57°-Eである。規模は長さが現状で壁上端で1.86m、壁下端は1.65m。幅は壁上端で65cm～98cm、壁下端で21cm～23cm。深さは地山上面から15cmを測る。断面形はU字形である。

遺物は検出されなかった。

6、柱穴群 (付挿図第6・付第7・付第10・付第15)

ア 遺構 (付挿図第6・付第7・付第10)

調査区の東側に広く分布している。

柱穴は12個が検出された。このうち2個は8-SB2に伴うものと考えられる。各柱穴の計測値は表第2に記した。

8-P3から8-P6の4個の柱穴は南西-北東の方向にほぼ直線的にあり、8-P9から8-P12の4個は8-SK6の集石土壌の西側を取り囲むように分布している。8-P7・8-P8の2個は前述の2グループの東西方向の間にある。

8-P3と8-P4の柱穴の間隔は柱穴の中心で4.7m、8-P4と8-P5が1.75m、8-P5と8-P6が1.6m。8-P7と8-P8が1.72m。8-P9と8-P10が1.45m、8-P10と8-P11が1.05m、8-P11と8-P12が95cmを測る。

イ 遺物（付挿図第15の90・91）

8-P7の埋土から縄文式土器（90・91）が出土している。

深鉢形土器（90・91） 90は口辺部片である。やや外に開き口唇部は内側に面取りし、内外面に一條の沈線めぐらししている。二枚貝の復縁またはクシ状器具を用いた右下がりの条痕が施されている。91は胴部片で、二枚貝の復縁による横位の粗い条痕が施されている。

遺物の時期は縄文時代晩期末の水神平式土器である。8-P7が造られた時期は、縄文時代晩期末と推測される。

7、方形周溝墓（付挿図第6・付第7・付第11・付第15・付第16・付第18、付図版第8・付第9・付第10・付第11・付第13・付第14・付第15）

（1） 8-SZ1（付挿図第6・付第7・付第11・付第15・付第16・付第18、付図版第8・付第9・付第10）

ア 遺構（付挿図第6・付第7・付第11、付図版第8・付第9・付第10）

調査区のBN区・CN区グリッドとBN拡張区・CN拡張区グリッドに跨って構築されている。北周溝が8-SZ2の南周溝を掘り込んでいる。

平面形は方形を呈し、周溝は南東隅と北東隅が切れた形状である。盛土は削平され認められなかったが、主体部の下底部が遺存していた。

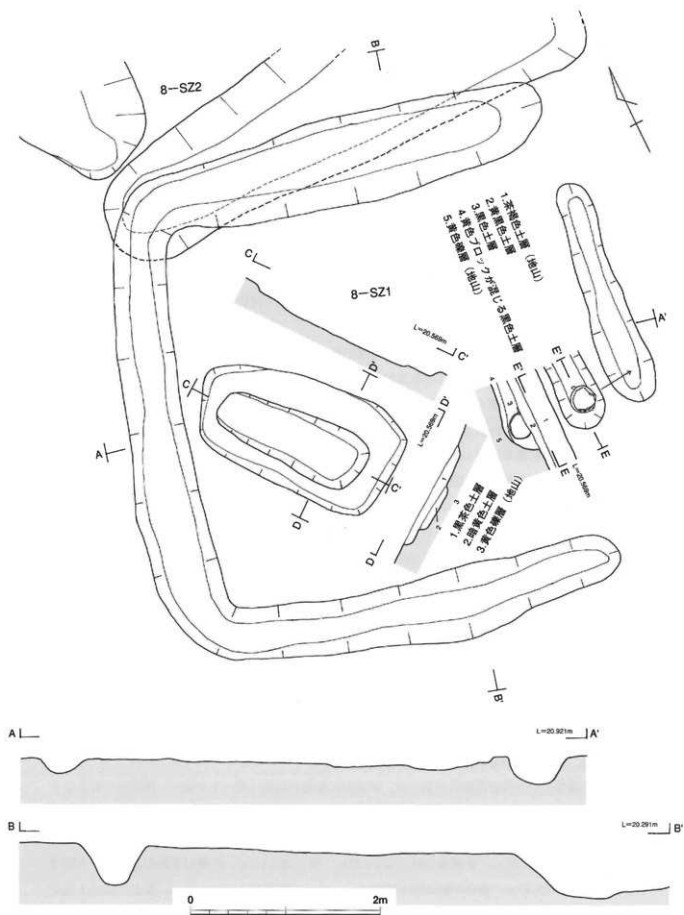
規模は東西の長さは外径が5.45m、内径は4.45m。南北は外径は5.6m、内径は4.3mを測る。周溝の幅は東周溝の壁上端で33cm～49cm、壁下端は15cm～23cm、深さは地山上面から18cmを測る。西周溝の壁上端で59cm～75cm、壁下端は23cm～32cm、深さは地山上面から33cmを測る。南周溝の壁上端で57cm～79cm、壁下端は22cm～32cm、深さは地山上面から55cmを測る。北周溝で壁上端で68cm～95cm、壁下端は30cm～55cm、深さは地山上面から43cmを測る。主軸方向はN-13°-Eを測る。

陸橋部がある東周溝の長さは壁上端で2.43mを測り、南周溝東端との間に1.5m、北周溝東端との間に55cmの幅の陸橋部を設けている。

周溝の埋土は東周溝と西周溝では上層が黒色土層、下層は暗黄色土層の2層。南周溝は上層が礫混じり黒色土層、下層が礫混じり黄褐色土層の2層。北周溝は上層から小礫混じり黒色土層、黒色土層、暗黒色土層、礫混じり暗黒色土層の4層である。

遺物は東周溝の南隅の床面から土師器の壺形土器が出土している。各周溝の埋土からは縄文式土器、弥生式土器、土師器、石器が出土している。

主体部は南北方向中程の西部に位置する。平面形は東端が西端に比べやや幅広い隅円長方形を呈する。長軸は南東方向を示している。断面形は浅いU字形で内外2段組になっている。長軸の方向は東南-西北である。規模は外壁の東西の長さ壁上端で2.15m、壁下端は2.0m。南北の幅は東西の壁上端で1.65m、壁下端は1.52m、東端部の壁上端で1.22m、壁下端は1.0m。内壁の東西の長さは壁上端で1.65m、壁下端は1.55m。南北の幅は壁上端で37cm～65cm、壁下端は32cm～45cm。深さは地山上面から上段で7cm、下段は16cmを測る。これらの形状から埋葬施設に削竹形木棺が用いられていたことが推察される。



付挿図第11 第8地区 8-SZ1・8-SZ2平面・断面図

埋土は上層が黒茶色土層、下層は暗黄色土層の2層である。遺物は埋土から縄文式土器と土師器が出土している。

イ 遺物(付挿図第15の92~96・付第16の97~104・付第18の129~133、付図版第13の8・付第14の1・付第15の6・7)

遺物の92~100・129~133は各周溝の埋土、101は東周溝の床面、102~104は主体部の埋土から出土している。縄文式土器(92・102~104)、弥生式土器(98~100)、土師器(93~97・101)、石器(129~133)が出土している。

深鉢形土器(92・102~104) 外面の調整により2類に分けられる。

1類(102~104) 繊維土器である。胴部片で、102~104は胎土に繊維を含み、内外面に繊維の痕跡がみられる。102は二又状器具を用い外面は左下がり、内面は縦位と右下がりの条痕が施されている。103・104は外面はヘラナデ、内面はヘラナデとハケメ調整されている。

2類(92) 擦痕が施されている。胴部片で横位に加えられている。

壺形土器(93・94・101) 93は小型壺で、頸部から胴部片である。頸部はハの字形に屈折している。胴部は球形を呈し、外面は横と右下がりのハケメ調整がされている。94は底部で、底面がやや上げ底に作っている。外面にヘラナデ痕がみられる。

101はほぼ完形品である。口頸部はハの字形に外開し、口縁部の器壁は頸部に比べ薄く作り、口唇はやや角張り、中程を窪ませている。胴部は球形を呈し、底部は径が小さく平底である。調整は外面の口頸部は縦ハケメ、上胴部は左下がりと右下がりのハケメ、下胴部は横ハケメ。内面は口頸部は横ハケメ、胴部は右下がりと横、底部は縦クシナデされている。

高坏形土器(95・96) 2点とも坏底部から脚上部である。坏部の底部は浅い盤状と考えられ、脚部はハの字に開き、3個の円孔を穿っている。脚部外面の95は上部の全面に、96の接合部の下部にクシ描き横線文をめぐらしている。内面は縦ナデ調整されている。

甕形土器(97~100) 97はS字口縁の口辺部片で、口縁部はS字形に広く開き、屈折部に稜をもち、口唇部の断面形は三角形を呈する。98・99はくの字口辺である。口径が腹部より大きく、口辺部は強くの字形に外方に屈折している。胴部は僅かに膨らみをもつ。器壁の厚みは同じで、口唇部は丸く作られている。99は口唇下端に棒状器具による円列圧痕をめぐらしている。調整は98は不定方向のハケメ、99は外面は横ヘラナデ、右下がりハケメ、内面はいずれも横ハケメである。100は台付甕の脚台部で、円錐台形で内湾ぎみに開いている。胴部と台部の接合部は、胴部の底が丸く出隅状に出ている。外面は右下がりハケメ、内面は不定方向のハケメ調整されている。

打製石斧(129) 扁平で自然礫を用い、片側縁の3分の1を欠損する。卵形を呈し、側縁部は片面から剥離調整を加え、刃部は円弧状を呈する刃円で、両面から剥離調整を加えてある。重さは41gを測り、石材は緑色片岩である。

石錘(130) 扁平で楕円形の自然礫を用いている。長軸方向の両端部の中央を裏表から剥離し、紐掛け扶りを作っている。重さは100gを測り、石材は凝灰岩である。

スクレイパー(131) 台形状を呈し、表面は剥離は加えず平らで、裏面に剥離調整を加えてある。刃部は片面剥離調整されている。重さは5gを測り、石材はサヌカイトである。

磨石 (132) 円礫の側縁の一部である。側縁が平坦に磨り減っている。重さは55gを測り、石材は硬砂岩である。

縦長剥片 (133) 五角形状を呈し、裏面に打面とリングが残る。側縁に使用痕らしきものがみられる。重さは16gを測り、石材は流紋岩である。

102～104は繊維土器で縄文時代早期で、このうち104は表裏面に条痕が施されており、この時期の条痕文土器と考えられる。92は晩期末の水神平式土器である。98～100は弥生時代中期後葉の長床式土器。93～97・101は古墳時代前期初頭の古式土器である浪ノ上・門前期様式と考えられる。

8-SZが造営された時期は、土師器の101の壺形土器が東周溝南端の床面に据え置かれ状態で出土していること、同じく土師器の93～97が埋土からまとまって出土していることから、古墳時代前期初頭と推察される。

(2) 8-SZ2 (付挿図第6・付第7・付第11・付第16、付図版第11・付第14)

ア 遺構 (付挿図第6・付第7・付第11、付図版第11)

調査区のBN拡張区・CN拡張区グリッドに跨がって位置する。8-SZ1の北周溝に8-SZ2の南周溝が掘り込んである。

8-SZ2は南周溝と西周溝が確認できたが、南周溝の北壁東側と西周溝の5分の4が調査区外にある。平面形は現状では明らかにできなかった。南周溝と西周溝との間に僅か10cmの陸橋状の切れ間がある。周溝の現状で規模は南周溝の長さは壁上端で5.5m、壁下端は5.0m。幅は南北の長さは壁上端1.18m～1.42m、壁下端は60cm～90cm。深さは地山上面から30cmを測る。西周溝は現状で長さ80cm、幅は1.25mが確認されただけである。

埋土は上層が黒色土層、下層が礫混じり暗黄色土層の2層である。遺物は埋土から弥生式土器と土師器が出土している。

イ 遺物 (付挿図第16の105～110、付図版第14の6)

弥生式土器 (106・107) と土師器 (105・108～110) がある。

壺形土器 (105～109) 105は推定復元して一個体とした。口頸部はハの字形に広くやや外反りし、器壁は口辺部から口唇部に向かうしたがって薄く作り、口唇部は丸めている。外面は右下がりハケメ、内面は横ハケメ調整されている。胴部は球形を呈し、底部は平底である。外面は縦ヘラミガキ、内面は右内面ヘラナデ調整されている。106は口辺部で、ハの字形に広く外反りし、口唇部は丸く作られている。器壁は厚く作り、外面は縦ハケメ、内面は横ハケメ調整されている。107は胴部片で、ヘラ描き斜格文と6条一組のクシ描き波文をめぐらしている。

108・109は底部である。108は平底で、器壁は粘土で厚く、底面はやや上げ底になっている。外面は右下がりハケメ、内面は横ハケメ調整されている。109は丸底で器壁は薄く、底面は上げ底である。外面は横ヘラミガキ、内面はヘラナデ調整されている。

高環形土器 (110) 口辺部の細片で、口唇部の内側を斜めに面取りし角張らせている。調整は外面は縦ヘラミガキ、内面の口唇部は横ヘラナデ、口辺部の内外面は縦ヘラミガキされている。

遺物の時期は106・107は弥生時代中期後葉の長床式土器。105・108～110は古墳時代前期初頭の古式土器である浪ノ上・門前期様式と考えられる。

8-SZ2が築造された時期は、南周溝の埋土から土師器の105・108～110が出土していることから、古墳時代前期初頭と推測される。なお8-SZ2と8-SZ1は同様式の古式土師器が出土しているが、8-SZ1の北周溝が8-SZ2の南周溝を掘り込んでおり、8-SZ1より8-SZ2の方が古く築造されたことになる。

8、表面採集遺物（付挿図第16の111～121・付第17の123～124、付図版第14の7・付第15の9）
遺物は縄文式土器（111～115）、弥生式土器（120～12）、土師器（116～119・123）、須恵器（124）、石器（135）がある。

深鉢形土器（111～115） 111は口辺部はほぼ直立し、口唇部は丸く作られている。112～115は胴部片である。5点とも二枚貝の復縁により、112～114は浅い右下がり、115は横位と左下がりの条痕が施されている。

壺形土器（120～123） 120・121は口辺部片で、くの字形に緩やかに外反りしている。120の口唇部は三角形ぎみ、外側に棒状器具により円文圧痕列をめぐらしている。外面は横ナデと縦ハケメ、内面は横位と右下がりハケメ調整されている。121は口唇部を丸めて作り、外面は横ナデと右下がりハケメ、内面は横ハケメ調整されている。122は脚台部で、上部は円筒形で中実し下部はハの字形に内彎ぎみに開く。台端部は角張っている。

123は台付壺の脚台部片で、ハの字形に直線的に開き、脚端部は薄く丸く作られている。内面は横ヘラナデ、指圧痕が残っている。

壺形土器（116） 小型壺の平底の底部である。

高環形土器（117～119） 117は坏部片で、ハの字形に内彎ぎみに開き、口唇部は丸く作ってある。内面は横ハケメ調整されている。118は脚部の上部で、ハの字に開き、3個の円孔を穿っている。119は小型で、口辺部と脚端部を欠く。坏部は盤部と口辺部の接合部に稜を作り、口辺部はハの字に直線的に外開きする。脚上部は中実し、下部でハの字に強く開く。調整は坏部の外面は右下がりヘラナデと横ハケメ、脚部は縦ヘラナデ、脚部の内面はヘラナデされている。

蓋環（124） 天井部の一部と口辺部の破片である。天井部は扁平に近い作りで、天井部と口辺部の接合部の外側に沈線をめぐらしている。口辺部は下方に直線的に下ろし、口唇部は丸く作られている。

スクレイパー（135） 縦長を剥片で、打面痕を残す。切り出しナイフ状を呈し、調整は片側縁に行われている。重さは4gを測り、石器はチャートである。

遺物の時期は111～115は縄文時代晩期末の水沖平式土器、120～122は弥生時代中期後葉の長床式土器、116～119・123は古墳時代前期初頭の古式土師器である浪ノ上・門前期様式、124は古墳時代後期の古墳出土須恵器第4型式と考えられる。

註1 久永春男「弥生式土器総括」『瓜野』豊橋市教育委員会 1963

註2 この第8地区の南隣に位置する浪ノ上遺跡B区の遺物包含層から縄文時代早期後葉のハツ崎Ⅰ式土器が出土しており、この繊維土器もほぼ同時期と考えている。

註3 久永春男「芋川遺跡出土縄文土器の分類について」『芋川遺跡』刈谷市教育委員会 1995

註4 樋口昇一・宮下健司ほか「時代と編年」『長野県史 考古資料編全1巻（4）遺構・遺物』長野県史刊行会 1988

註5 註1と同じ

註6 遺物は8-SK3の埋土から出土したものであるが、一部に8-SK4の埋土から出土したものが含まれている可能性がある。

第5節 ま と め

第2地区・第8地区の発掘調査において確認された遺構は、第2地区では竪穴住居址1軒。第8地区では竪穴状遺構2軒、土壇7基、溝状遺構1条、柱穴群12個、方形周溝墓2基である。

第2地区は台地縁端部の斜面にあり、竪穴住居址2-SB1の1軒が確認されている。住居址は南側半分が遺存していたが、北側半分は自然破壊により確認することができなかった。南側半分の地山を掘り下げ、その土砂を用い北側半部分を埋め整地されたと考えられる。平面形は遺存部から推定復元して楕円形と考えられる。柱穴は27個が検出され、主柱は住居址内に2個、主柱の支柱と考えられるものが周溝内3個。住居址南外側周辺には住居を支えたと考えられる支柱が22個と多数認められ、住居址の近い方1列目7個、2列目7個、3列目3個、4列目4個とほぼ列をなしてた。

時期は床面からこの地方の須恵器第3型式の坏蓋が出土しており、年代は6世紀代と考えられる。この時期の一般的な住居址は、台地平地に平面形が方形に造られるが、ここでは斜面に楕円形に造られている。特に住居址南外側周辺に22個の支柱と考えるられる小ピットが確認されている。これらの支柱は冬季に北西風が強く吹き突けるために備えたものであろうか、また建て替えが度々行われたことによるものであろうか。

住居址は昭和56年から昭和57年にかけて行われた浪ノ上遺跡本調査(註1)で明らかになった集落群のD調査区から北へ約30m離れ、住居を造るには不向きな独立地にある。これにより日常生活を営むために使用されたものとは考えにくい。ここは北方の眼下に、豊川によって形成された沖積地に広がる稲作水田地帯が見渡すことができ、稲作水田に関連する作業または監視小屋的なものではないかと推察している。

第8地区は台地上の舌状台地の基部にある。竪穴状遺構8-SB1・8-SB2の2軒は、明確な規模や平面形は明らかにされなかった。8-SB1の床面から弥生時代中期後葉の長床式土器の壺形土器(64)と甕形土器(65~67)がまとめて出土している。8-SB2は縄文時代晩期末に営まれた8-SK3が掘り込まれているため、8-SK3より古い時期と考えられる。

土壇8-SK1~8-SK7の7基については、規模や時期等を表第3に記した。8-SK1~8-SK4は、平面形や規模等から成人を仰臥させ埋葬した土壇墓と推察される。8-SK6は8-SK1~8-SK4に比べ規模は小さく、土壇内に32個の河川礫が埋積しており、そのなかに石皿(134)を含んだ集石土壇である。時期はいずれも縄文時代晩期末と考えられる。8-SK5・8-SK7は性格と時期は明らかにされなかった。

柱穴群8-P1~8-P12の12個は明確な住居址に伴うものではなく、遺物は唯一8-P7の埋土から縄文時代晩期末の条痕文系の水沖平式土器が出土している。竪穴住居址が削平されたものか平地住居址に伴うものであろうか。

方形周溝墓8-SZ1・8-SZ2の2基は、8-SZ1はほぼ現状を遺存していたが、8-SZ2は南周溝とに西周溝の南端部が検出された(註2)。8-SZ1の平面形は方形を呈し、四方を溝で囲み北東隅と南東隅との2カ所に陸橋部をもつものである。規模は東西の長さ5.45m、南北5.60m

付表第3 第8地区 土壌一覧表

土壌番号	平面形	断面形	規模・深さ (cm)	時期	性格
SK-1	隅円方形	U字形	225×230・52	縄文晩期末期	土壌墓
SK-2	小判形	V字形	165×262・63	縄文晩期末期	土壌墓
SK-3	隅円長方形	U字形	120×260・79	縄文晩期末期	土壌墓
SK-4	不正楕円形	U字形	150×300・78	縄文晩期末期	土壌墓
SK-5	円形	U字形	72・75・10	不明	
SK-6	楕円形	鍋底形	66×77・13	縄文晩期末期	集石土壌
SK-7	小判形	U字形	60×92・12	不明	

を測る。台状部の盛土は削平されていたが、地山に掘り込まれた主体部の底部が確認された。主体部は南北方向中程の西部に位置し、平面形は台形に近い長方形を呈し、横幅が東南端に比べ西北端がやや狭くなっている。床面が二段組であることから外壁は土壌の掘り方、内壁は割竹形木棺（註3）が据え置かれたのではないかと考えられる。

遺物は東周溝の南端部底面に壺形土器（101）が、北周溝の中央東寄りの底面から10cm上部の埋土から小型壺形土器（93）、壺形土器（94）、高坏形土器（95・96）の割られ破片の状態でまとまって出土している。前者は被葬者の埋葬時に供えられ、後者は埋葬後の祭祀に伴う遺物と推察される。これらの古式土師器はこの地方の門前・浪ノ上期であり、時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

8-SZ2は8-SZ1の北周溝が8-SZ2の南周溝に掘り込み重なり合う状態で検出され、それに西周溝の南端一部が検出された。北周溝と南周溝の間に10cmほどの陸橋状の切れ間が認められた。遺物は南周溝埋土から古式土師器の壺形土器（105・106・108・109）、高坏形土器（110）の門前・浪ノ上期が出土している。時期は8-SZ1より古いが同時期と考えられる。

この2つの方形周溝墓の被葬者は、集落の有力指導者層の一員と推察される。

第8地点からは縄文時代晩期末の土壌墓4基、古墳時代前期初頭の方形周溝墓2基等が検出されている。この調査の翌昭和56（1981）年に浪ノ上遺跡の第1次調査（註4）が実施され、第8地区北隣り舌状地にあるA区からほぼ同時期の竪穴住居址2軒、土壌22基（註5）、方形周溝墓5基が検出されている。これによりA区の南端部にあたる同一性格の遺跡であることが明らかになった。

このことからこの地区一帯が、縄文時代晩期末と弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけての浪ノ上集落の墓域であったと考えられる。

註1 住吉政治・伊藤 恵・小畑頼孝・芳賀 陽『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第100集 浪ノ上 1』豊橋市教育委員会 2009

註2 この方形周溝墓が検出された昭和55（1980）年時点において、東三河地方では4例目の方形周溝墓の発見となる。昭和44～45（1969～1970）年の新城市タイカ遺跡、愛知県では初めての発見例で、周溝の1カ所に陸橋部があり、時期は弥生時代後期後葉で欠山式土器が出土している。昭和51（1976）年の豊橋市見丁塚遺跡F地点、豊橋市では初めての発見例で、周溝の4カ所に陸橋部があったと考えられる。時期は弥生時代中期中葉で下長山式土器が出土している。昭和52（1977）年の蒲都市門前遺跡、愛知県で最古の発見例で、隅円形を呈し1カ

所に陸橋部があり、時期は弥生時代中期前葉で続水神平式土器が出土している。なお主体部が確認されたのは浪ノ上遺跡の8-SZ1が初めてである。

天野暢保ほか 新城市誌資料13『新城市上平井タイカ・豊栄真向遺跡』新城市教育委員会 1979

小野田勝一・竹内尚武・小畑頼孝・森田勝三・久永春男ほか『門前遺跡』蒲郡教育委員会 1980

小畑頼孝・森田勝三ほか『豊橋市東脇 見丁塚F遺跡発掘調査日誌』牟呂町誌編集委員会 1979

小畑頼孝・森田勝三「見丁塚遺跡F地点」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第59集 東脇遺跡群』豊橋市教育委員会 2001

見丁塚遺跡F地点の南周溝から弥生時代中期中葉の下長山式土器の壺形土器が出土している。最近の調査から測して土器棺であったと考えられる。

- 註3 昭和54年に実施した浪ノ上遺跡範囲確認調査の第6地区の竪穴住居址床面下から、割竹形木棺が1基確認されている。

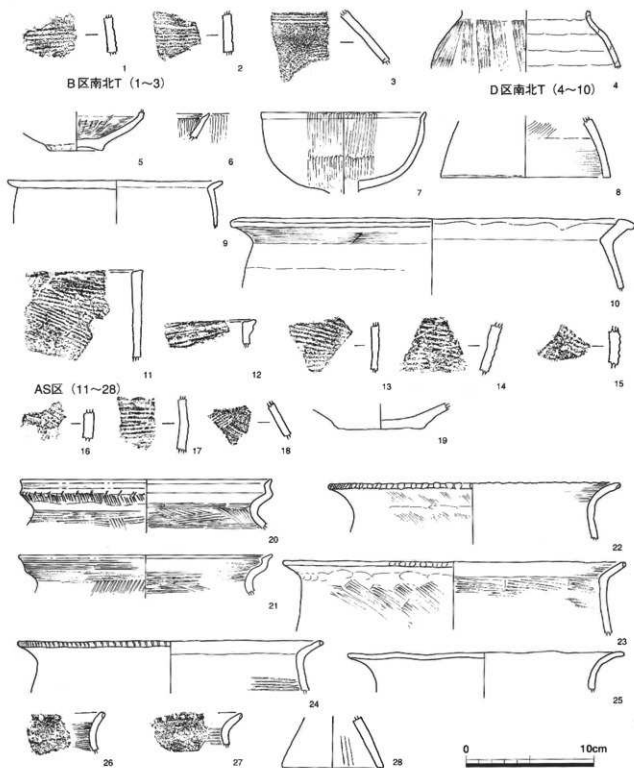
木下克己・森田勝三「浪ノ上遺跡範囲確認調査」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告 第3集』豊橋市教育委員会 1982

- 註4 註1に同じ

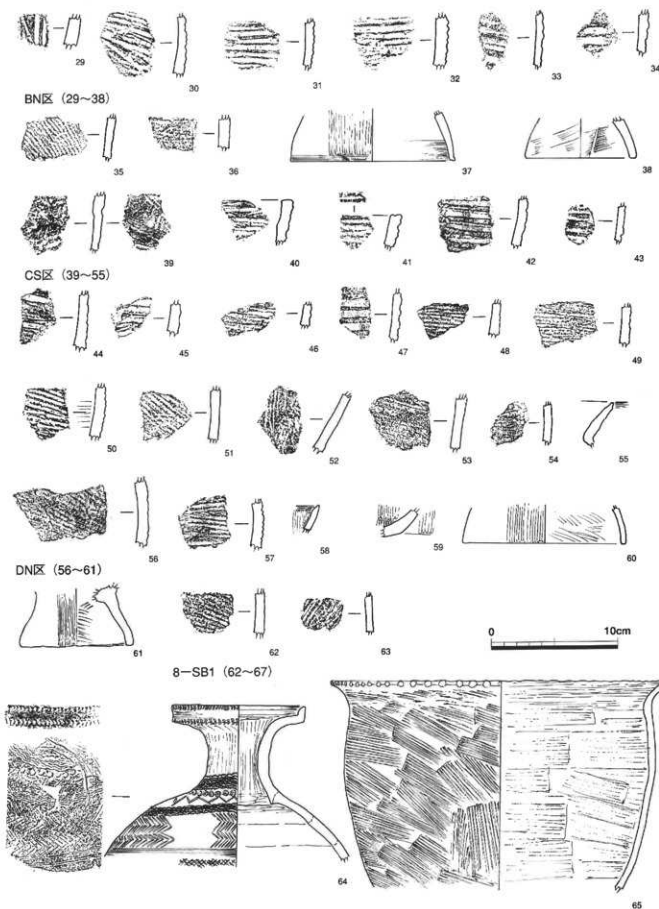
- 註5 上墳22基のうち、土墳の長さ1m、幅50cm以上。縄文時代晩期の条痕文系土器が出土しているものについては土墳墓と推測される。これにより17基ほどがそれにとると考えられる。



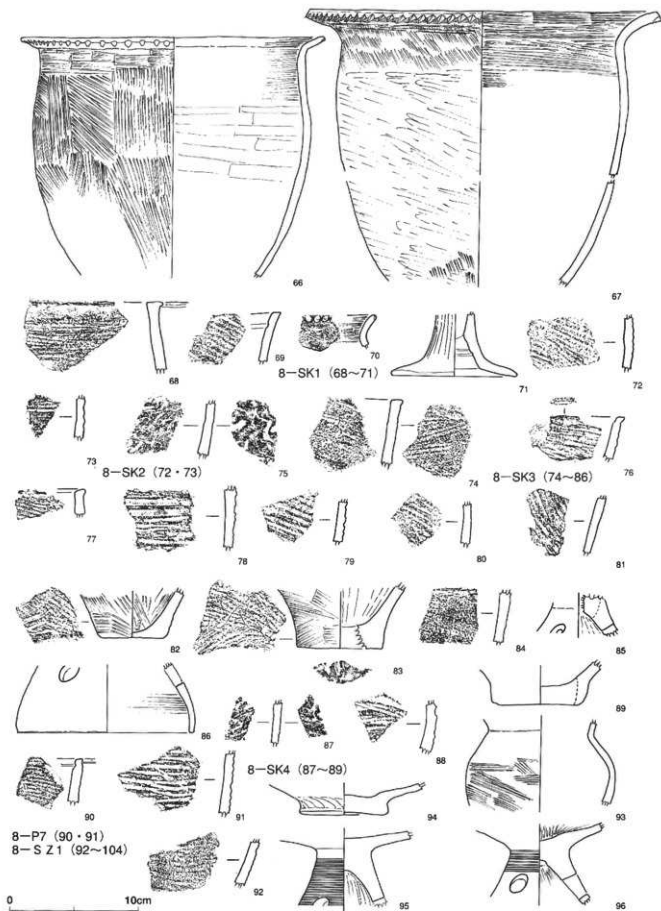
付挿図第12 第2地区出土 土器・土師器・須恵器実測図



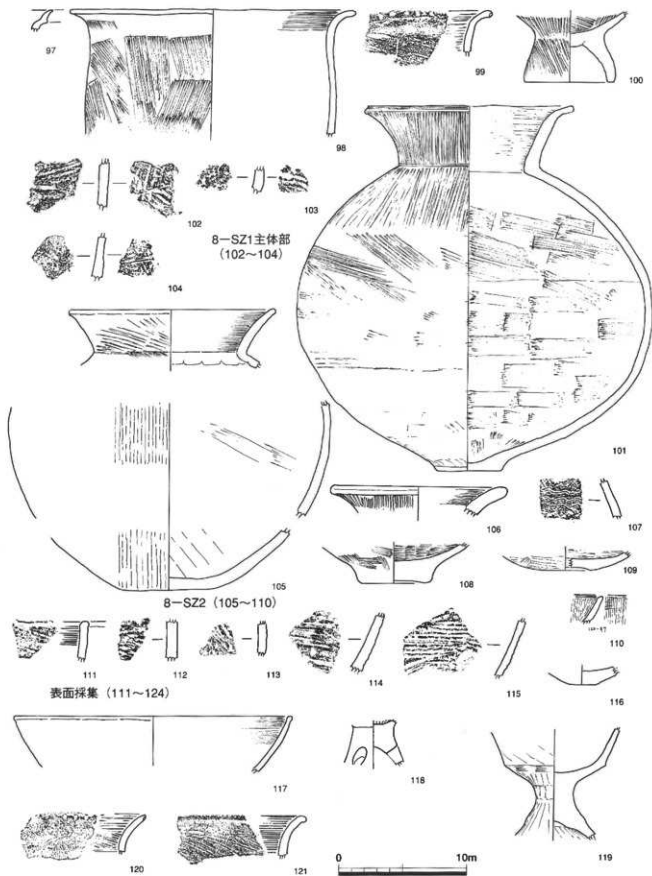
付挿図第13 第8地区出土 土器・土師器実測図 1



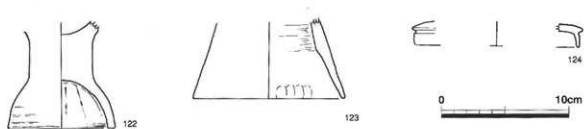
付挿図第14 第8地区出土 土器・土師器実測図2



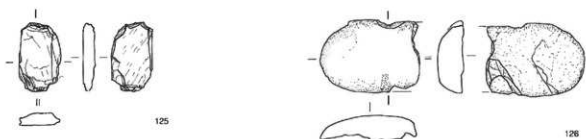
付挿図第15 第8地区出土 土器・土師器実測図3



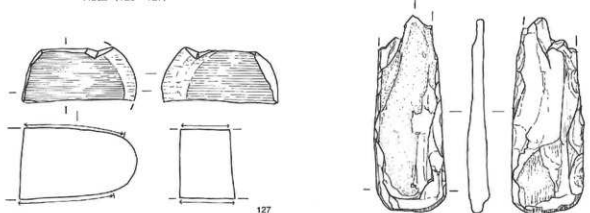
付挿図第16 第8地区出土 土器・土師器実測図 4



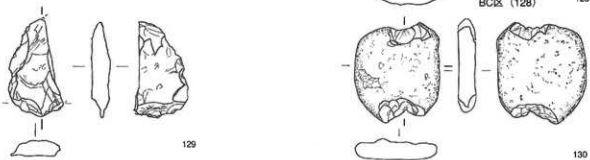
付挿図第17 第8地区出土 土器・土師器・須恵器実測図



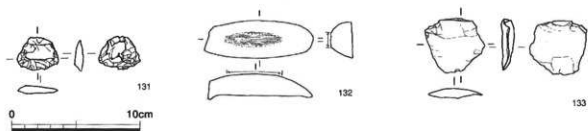
AS区 (125~127)



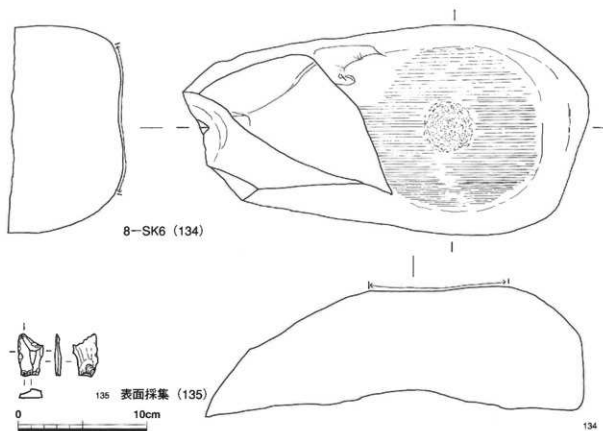
BC区 (128)



8-SZ1 (129~133)



付挿図第18 第8地区出土 石器実測図 1



付挿図第19 第8地区出土 石器実測図2

付表第4 第2地点 土器観察表

検出 番号	出土地点	層位	器種	部位	法量 (cm)										口縁部 残存率	記録 番号
					口径	胴径	底径	脚上 径	脚径	器高	坯高	頸高	胴高	脚高		
12-1	SB1	黒色土層上部	深鉢	胴部												
12-2	SB1	黒色土層上部	高坏	脚部				4.0								
12-3	SB1	黒色土層	高坏	脚部			13.6									10
12-4	SB1	床面	高坏	口辺部	13.0										20	

付表第5 第8地点 土器観察表

検出 番号	出土地点	層位	器種	部位	法量 (cm)										口縁部 残存率	記録 番号
					口径	胴径	底径	脚上 径	脚径	器高	坯高	頸高	胴高	脚高		
13-1	B区南北T	黒色土層	深鉢	胴部												
13-2	B区南北T	黒色土層	深鉢	胴部												
13-3	B区南北T	黒色土層上面	甕	上胴部												
13-4	D区南北T	黒色土層	甕	上胴部		15.0										
13-5	D区南北T	黒色土層	甕	底部			4.4									100
13-6	D区南北T	黒色土層	高坏	口辺部											5	
13-7	D区南北T	黒色土層	高坏	坏部	13.0										20	
13-8	D区南北T	黒色土層	高坏	脚部			13.4									15
13-9	D区南北T	黒色土層	甕	口頸・上胴部	17.0										30	
13-10	D区南北T	黒色土層	甕	口頸・上胴部	30.0										30	
13-11	AS区	黒色土層	深鉢	口辺・上胴部											10	
13-12	AS区	黒色土層	深鉢	口辺部											5	
13-13	AS区	黒色土層	深鉢	胴部												
13-14	AS区	黒色土層	深鉢	胴部												
13-15	AS区	黒色有機土層	深鉢	胴部												
13-16	AS区	黒色有機土層	深鉢	胴部												
13-17	AS区	黒色有機土層	深鉢	胴部												
13-18	AS区	黒色有機土層	深鉢	胴部												
13-19	AS区	黒色有機土層	甕	底部			7.0									50
13-20	AS区	黒色有機土層	甕	口辺部	19.8										40	
13-21	AS区	黒色有機土層	甕	口辺部	20.0										20	
13-22	AS区	黒色有機土層	甕	口辺・上胴部	23.0										30	
13-23	AS区	黒色有機土層	甕	口辺・上胴部	27.0										20	
13-24	AS区	黒色有機土層	甕	口辺・上胴部	24.0										10	
13-25	AS区	黒色有機土層	甕	口辺部	22.0										20	
13-26	AS区	黒色有機土層	甕	口辺部											10	
13-27	AS区	黒色有機土層	甕	口辺部											10	
13-28	AS区	黒色有機土層	甕	脚上部			8.0									20
14-29	BN区	黒褐色土層	深鉢	胴部												
14-30	BN区	黒褐色土層	深鉢	胴部												
14-31	BN区	黒褐色土層	深鉢	胴部												
14-32	BN区	黒褐色土層	深鉢	胴部												
14-33	BN区	黒褐色土層	深鉢	胴部												
14-34	BN区	黒褐色土層	深鉢	胴部												
14-35	BN区	黒褐色土層	深鉢	胴部												
14-36	BN区	黒褐色土層	深鉢	胴部												
14-37	BN区	黒褐色土層	高坏	脚部			13.0									15
14-38	BN区	黒褐色土層	甕	脚上部			9.0									30
14-39	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-40	CS区	黒色土層	深鉢	口辺部												
14-41	CS区	黒色土層	深鉢	口辺部											5	
14-42	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												

調 整		胎 土	焼成	色調	備 考
内 面	外 面				
横ナデ	やや粗い横条痕	砂粒含	良好	赤褐色	
	縦ナデ	砂粒含	良好	赤茶褐色	円孔3個
縦ヘラミガキ	横ハケメ	砂粒含	良好	赤褐色	
		密	良好	青灰色	須恵窯

調 整		胎 土	焼成	色調	備 考
内 面	外 面				
	横条痕	砂粒含	良好	赤褐色	
	横条痕	砂粒含	良好	明赤褐色	7条一組工具
		砂粒含	良好	赤褐色	3条一組横線文、5条一組波文
		密・砂粒含	良好	赤褐色	
右下がりハケメ					
ハケメをナデ消し	縦ナデ	砂粒少含	良好	淡赤褐色	上げ底
横ナデ・縦ヘラミガキ	縦ヘラミガキ	砂粒含	良好	淡赤褐色	
縦横ヘラミガキ	左下がりヘラミガキ	砂粒少含	良好	淡茶色	
	左下がりハケメ・横ナデ	砂粒含	良好	暗灰茶色	
		砂粒多含	良	表・暗赤褐色、内・黒褐色	
横ナデ	横ナデ	砂粒多含	良好	淡赤褐色	
横ナデ	浅い横・右下がり条痕	砂粒含	良好	茶褐色	口端部左斜平坦
横ナデ	浅い左下がり条痕	砂粒含	良好	淡茶色	口端部左斜平坦やや窪む
横ナデ	浅い右下がり条痕	砂粒含	良好	赤褐色	
	やや粗い・右下がり横痕	砂粒含	良	茶色	
	羽状条痕	砂粒含	良好	黒褐色	
横ナデ	浅い・右下がり条痕	砂粒含	良好	茶褐色	
	横条痕	砂粒含	良好	淡茶色	
	浅い羽状条痕	密	良好	赤褐色	
ナデ		砂粒含	良	赤茶色	
横・不定ハケメ	縦・横ナデ	砂粒少含	良好	淡茶色	S字口縁
横・不定ハケメ	横・左下がりハケメ	砂粒・小礫含	良好	淡灰褐色	S字口縁
横ハケメ	右下がりハケメ	砂粒含	良	淡茶褐色	口端部左斜棒状圧痕
型痕ナデ、右下がりハケメ	横ハケメ、ナデ	砂粒少含	良好	表・淡赤褐色、内・淡茶褐色	口端棒状圧痕
横ハケメ	横ナデ	砂粒含	良好	赤褐色	端部右斜ヘラキザミ
		砂粒含	良好	淡茶色	
横・左下がりハケメ	横ナデ	砂粒含	良好	淡茶色	口端部棒状圧痕
横ハケメ	右下がりハケメ	砂粒含	良好	淡茶褐色	口端部左斜棒状圧痕
縦ナデ		砂粒・小礫含	良	淡褐色	台付甕
		砂粒含	良好	表・淡茶色、内・暗褐色	
	やや粗い・右下がり条痕	砂粒含	良好	表・茶褐色、内・赤褐色	
横ナデ	やや粗い横条痕	砂粒多含	良好	淡茶色	
	やや粗い横条痕	砂粒含	良好	淡褐色	
横ナデ	やや粗い横条痕	砂粒多含	良好	暗赤褐色	
横ナデ	やや粗い横条痕	砂粒多含	良	暗赤褐色	
横ナデ	右下がり条痕(押痕)	砂粒含	良好	赤褐色	
	ナデ	砂粒多含	良好	暗赤褐色	
横ナデ	縦ヘラミガキ、横ナデ	密	良好	赤褐色	
左下がりハケメ	左下がりナデ	砂粒含	良好	暗茶色	台付甕
横・縦ナデ		繊維・砂粒含	良好	表・淡赤褐色、内・淡茶色	繊維土着
横ナデ	やや粗い横条痕	砂粒・小礫含	良好	赤褐色	口端部平坦
横ナデ	やや粗い横条痕	砂粒含	良好	淡茶色	口端部平坦中程沈線
縦ナデ	荒い横条痕	砂粒含	良好	赤褐色	

棟号 番号	出土地点	層位	器種	部位	法量 (cm)										口縁部 残存率	縁部 形状
					口徑	胴徑	底徑	脚上 部徑	脚徑	器底	坯高	頸高	胴高	脚高		
14-43	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-44	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-45	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-46	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-47	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-48	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-49	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-50	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-51	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-52	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-53	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-54	CS区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-55	CS区	黒色土層	甕	口辺部											5	
14-56	DN区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-57	DN区	黒色土層	深鉢	胴部												
14-58	DN区	黒色土層	高坏	口辺部											5	
14-59	DN区	黒色土層	高坏	平底部												
14-60	DN区	黒色土層	高坏	脚底部												
14-61	DN区	黒色土層	甕	脚台部				12.0								15
14-62	SB1	黒色土層	深鉢	胴部				9.0								10
14-63	SB1	黒色土層	深鉢	胴部												
14-64	SB1床面	黒色有機土層	甕	口縁・上胴部	10.4										100	
14-65	SB1床面	黒色有機土層	甕	口辺・胴部	27.0	24.8									90	
15-66	SB1床面	黒色有機土層	甕	口辺・胴部	24.0	22.0									40	
15-67	SB1床面	黒色有機土層	甕	口辺・胴部	27.5	23.0									30	
15-68	SK1	埋土	深鉢	口辺部											5	
15-69	SK1下部	埋土	深鉢	口辺部												
15-70	SK1	埋土	甕	口辺部											5	
15-71	SK1	黒色土層	高坏	胴部			10.0									30
15-72	SK2	埋土	深鉢	胴部												
15-73	SK2	埋土	深鉢	胴部												
15-74	SK3	埋土	深鉢	胴部												
15-75	SK3	埋土	深鉢	口辺部											5	
15-76	SK3	埋土	深鉢	口辺部											5	
15-77	SK3	埋土	深鉢	口辺部												
15-78	SK3	埋土	深鉢	胴部												
15-79	SK3	埋土	深鉢	胴部												
15-80	SK3	埋土	深鉢	胴部												
15-81	SK3	埋土	深鉢	胴部												
15-82	SK3	埋土	深鉢	底部		5.2									20	
15-83	SK3	埋土	深鉢	底部		7.0									20	
15-84	SK3	埋土	深鉢	胴部												
15-85	SK3	埋土	高坏	脚部				4.4								
15-86	SK3	埋土	高坏	脚部			13.8								20	
15-87	SK4	埋土	深鉢	胴部												
15-88	SK4	埋土	深鉢	胴部												
15-89	SK4	黒色土層	深鉢	底部			7.8								80	
15-90	P7	埋土	深鉢	口辺部												
15-91	P7	埋土	深鉢	胴部												
15-92	SZ1西側溝間壁	埋土	深鉢	胴部												
15-93	SZ1西側溝間壁	黒色有機土層	甕	胴部		11.0									5	
15-94	SZ1北側溝間壁	黒色有機土層	甕	底部			6.9								100	
15-95	SZ1北側溝間壁	黒色有機土層	高坏	坏底部・脚部				4.4								
15-96	SZ1北側溝間壁	黒色有機土層	高坏	坏底部・脚部				4.4								
16-97	SZ1北側溝間壁	埋土	甕	口縁部											5	

調 整		胎 土	焼成	色調	備 考
内 面	外 面				
	横条痕	砂粒含	良好	暗赤褐色	
横ナデ	浅い粗い横条痕	砂粒含	良好	暗茶褐色	炭化物付着
	浅い横条痕	砂粒含	良好	表・茶褐色、内・暗褐色	
	横条痕	砂粒・小礫含	良好	暗赤褐色	
横ナデ	浅い横条痕	砂粒含	良好	暗茶褐色	
横ナデ	やや粗い右下がり条痕	砂粒含	良好	茶褐色	
横ナデ	浅い右下がり上痕	砂粒・小礫含	良好	茶褐色	口端部平坦
横ナデ	やや粗い横条痕	砂粒含	良好	褐色	
横ナデ	右下がりナデ	砂粒含	良好	褐色	
横ナデ	右下がりナデ	砂粒含	良好	赤褐色	
	浅い縦・左下がり条痕	小礫2~4mm含	良好	赤褐色	
横ナデ	浅い横・左下がり条痕	砂粒含	良好	茶褐色	
	横ナデ	砂粒含	良好	暗茶色	
	浅い右下がり上痕	砂粒・小礫含	良好	淡赤褐色	
横ナデ	右下がり条痕	砂粒含	良好	灰褐色	
横ナデ・縦ナデ		砂粒含	良好	淡赤褐色	
縦ヘラミガキ	縦ヘラミガキ	砂粒含	良好	淡茶色	
不定ハケメ	縦ヘラミガキ	砂粒含	良好	淡赤褐色	底面に中程沈線
不定ハケメ	縦ナデ	砂粒含	良好	淡茶色	
横ナデ	浅い横条痕	砂粒少含	良好	赤褐色	
	浅い左下がり条痕	砂粒含	良好	赤茶色	
右下がり・縦ナデ	横・縦・横ナデ	砂粒含	良好	黒褐色	押小・波・円・縦・波・お伏・横・斜格文
横・右下がりナデ	横ハケメ・横・右下がりナデ	砂粒含	良好	淡茶色	黒斑有り、口端部棒状圧痕
横・縦・右下がりハケメ・ナデ	横ハケメ・ナデ	砂粒・小礫含	良好	暗茶褐色	口端部棒状圧痕
横・右下がりハケメ・ナデ	横・右下がりハケメ	砂粒含	良好	淡灰茶色	口端部ヘウキザリ
横ナデ	浅い横条痕	砂粒含	良好	赤褐色	口端部外拡張平坦
横ナデ	浅い右下がり条痕	砂粒含	良好	淡赤褐色	内面1条沈線
横ハケメ	右下がりナデ	砂粒含	良好	淡茶褐色	口端部棒状圧痕
縦・横ナデ	縦ヘラミガキ	密・砂粒含	良好	赤褐色	
横ナデ	浅い右下がり条痕	砂粒含	良好	暗赤褐色	
	やや浅い横条痕	砂粒含	良好	暗赤褐色	
		繊維・砂粒含	良好	表・淡茶色、内・赤褐色	繊維土器
右下がりナデ	右下がり条痕(ナデ)	砂粒・小礫含	良好	茶褐色	口端部平坦
	浅い右下がり条痕	砂粒・小礫含	良好	赤茶色	口端部平坦外方拡張
横ナデ	やや右下がり条痕	砂粒・小礫含	良	赤褐色	口端部外方拡張左斜平坦
横ナデ	やや粗い横条痕	小礫2~4mm含	良好	赤茶色	
横ナデ	右下がり条痕	砂粒多含	良好	赤褐色	
横ナデ	右下がり条痕	砂粒・小礫1~2mm含	良	赤褐色	
	右下がり横条痕	砂粒・小礫含	良好	赤褐色	
不定ハケメ	浅い横・右下がり条痕	砂粒・小礫含	良好	茶褐色	
縦ナデ	浅い不定方向条痕	砂粒・小礫含	良好	茶褐色	
	右下がりヘラナデ	砂粒・小礫含	良好	暗茶色	
	縦ナデ	密	良好	淡茶褐色	円孔3個
	横ナデ	砂粒少含	良好	赤褐色	円孔3個
横ナデ	横ナデ	繊維・砂粒含	良好	茶褐色	繊維土器
	粗い横・左下がり条痕	砂粒含	良好	赤褐色	
		小礫5~7mm含	良	淡茶色	
横ナデ	やや粗い右下がり条痕	砂粒含	良好	赤茶色	内面1条沈線
	横条痕	砂粒多含	良好	暗赤褐色	
	浅い横条痕	砂粒含	良好	赤褐色	
横ナデ	不定方向ハケメ	砂粒含	良	明褐色	
	指ナデ	砂粒・小礫含	良好	淡茶色	やや上げ底
縦ナデ		砂粒含	良好	赤褐色	27本以上横線文、円孔3個
横ナデ		砂粒含	良好	赤褐色	9条一組横線文、円孔3個
		砂粒含	良好	淡明茶色	S字口縁、表面風化

検出 番号	出土地点	層位	器種	部位	法量 (cm)										口縁部 残存率	総重量
					口径	胴径	底径	脚上 部径	脚径	器高	坯高	頸高	胴高	脚高		
16-98	SZ1北周溝側壁	埋土	甕	口辺・上胴部	22.6	19.8									30	
16-99	SZ1北周溝側壁	埋土	甕	口辺部											10	
16-100	SZ1北周溝側壁	黒色有機土層	甕	下胴・脚台部			7.2	5.5							60	
16-101	SZ1東周溝底部	埋土	甕		16.2	18.2	4.8								80	100
16-102	SZ1主体部	黒茶色層	深鉢	胴部												
16-103	SZ1主体部	黒茶色層	深鉢	胴部												
16-104	SZ1主体部	黒茶色層	深鉢	胴部												
16-105	SZ2南周溝	埋土	甕	口辺・下胴部	16.4	25.5									40	100
16-106	SZ2南周溝	埋土	甕	口辺部	14.0										20	
16-107	SZ2南周溝	埋土	甕	上胴部												
16-108	SZ2南周溝	埋土	甕	底部			5.4								70	
16-109	SZ2南周溝	埋土	甕	底部			4.0								40	
16-110	SZ2南周溝	埋土	高坏	口辺部											5	
16-111	表面採集		深鉢	口辺部											5	
16-112	表面採集		深鉢	胴部												
16-113	表面採集		深鉢	胴部												
16-114	表面採集		深鉢	胴部												
16-115	表面採集		深鉢	胴部												
16-116	表面採集		甕	底部			2.4								45	
16-117	表面採集		高坏	坏部	22.0										10	
16-118	表面採集		高坏	脚部				3.0								
16-119	表面採集		高坏	坏・脚部				3.0								
16-120	表面採集		甕	口辺部											10	
16-121	表面採集		甕	口辺部												
17-122	表面採集		甕	脚台部	8.4	5.0	7.5								20	
17-123	表面採集		甕	脚台部			12.0								30	
17-124	表面採集		高坏	口辺部											5	

付表第6 第8地点 石器観察表

検出 番号	出土地点	層位	種類	法量 (cm, g)				石材	残存率	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ			
18-125	ASE区	黒色有機土層	打製石斧	5.5	3.2	9.5	28	緑色片岩	100	
18-126	ASE区	黒色土層	石鏃	5.8	7.8	2.0	98	硬砂岩	70	
18-127	ASE区	黒色土層	磨石	9.0	4.0~4.3	5.5	373	砂岩	—	両面磨部
18-128	BS区	黒色土層	局部磨製石斧	15.3	4.7~5.4	0.8~1.7	208	片麻岩	80	
18-129	SZ1西周溝	埋土	打製石斧	7.7		0.5~1.4	41	緑色片岩	70	表面風化
18-130	SZ1西周溝底部	埋土	石鏃	7.5	6.8	1.3~1.5	100	凝灰岩	100	
18-131	SZ1北周溝	暗黄色土層	スクレイパー	3.2	2.6	0.4~0.7	6	サスカイト	100	
18-132	SZ1北周溝	埋土	磨石	8.5	2.9	1.7	55	硬砂岩	100	
19-133	SZ1東	黒色土層	縦長刮片	4.3	3.5	0.7~1.0	16	凝灰岩	100	
19-134	SK6	黒色土層	石皿	32.1	11.4~16.7	7.9~9.6	7100	砂岩	100	
19-135	表面採集		スクレイパー	3.4	1.9	0.3~0.5	4	チャート	100	

調 整		胎 土	焼成	色調	備 考
内 面	外 面				
不定ハケメ	横ハケメ、ナデ	小礫3～5mm含	良	茶褐色	炭化物付着
横ハケメ	縦・右下がりハケメ	砂粒含	良好	淡赤褐色	口端部棒状圧痕
右下がり・縦ハケメ	右下がりハケメ	砂粒含	良	淡褐色	内部内面風化
横ナデ・右下がり・縦ハケメ	縦ハケメ・左下がりハケメ・横ナデ	砂粒含	良好	茶褐色	露出28.7cm、外面一部赤褐色
縦・右下がりナデ	浅い横条痕	繊維・砂粒含	良好	表・淡赤褐色、内・淡茶色	繊維土器
横ハケメ	ナデ	繊維・密	良好	表・淡赤褐色、内・淡茶色	繊維土器
横ハケメ	ナデ	繊維・密	良好	表・赤褐色、内・淡茶色	繊維土器
横ハケメ・右下がりナデ	右下がりハケメ・縦・横ナデ	砂粒含	良好	灰褐色	
横ナデ	縦ハケメ	砂粒含	良好	淡茶色	口端部左斜平坦
		砂粒含	良好	茶褐色	斜格子・波文
不定ナデ	横ハケメ	砂粒含	良好	淡茶色	
横ナデ	横ナデ	砂粒含	良好	淡茶色	上げ底
縦・横ナデ	横ナデ・縦・横ナデ	密	良好	赤褐色	
横ハケメ	浅い・右下がり条痕	砂粒含	良好	赤褐色	
	横条痕	砂粒含	良好	赤褐色	
	浅い・右下がり条痕	砂粒含	良好	赤褐色	
	浅い・横・右下がり条痕	砂粒・小礫含	良好	赤褐色	
左下がりナデ	横・左下がり条痕	砂粒・小礫5mm含	良好	赤褐色	
ナデ		砂粒少含	良好	淡赤褐色	
横ナデ		小礫7mm含	良好	淡赤褐色	
		砂粒含	良好	赤褐色	円孔3個
縦ナデ	斜・縦ナデ、横ハケメ	小礫2～5mm含	良好	赤褐色	口辺・脚端部欠損
横・斜ナデ	横・縦ハケメ	砂粒少含	良好	淡茶色	口辺部棒状圧痕
横ナデ	右斜ハケメ	砂粒少含	良好	淡茶色	
横ナデ	縦・横ナデ・横ナデ	砂粒含	良好	赤褐色	
横ナデ・指ナデ		砂粒含	良	赤褐色	黒斑有り、表面風化
		密	良好	青灰色	須恵器

